

比恵 46

—比恵遺跡群 第99次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第955集

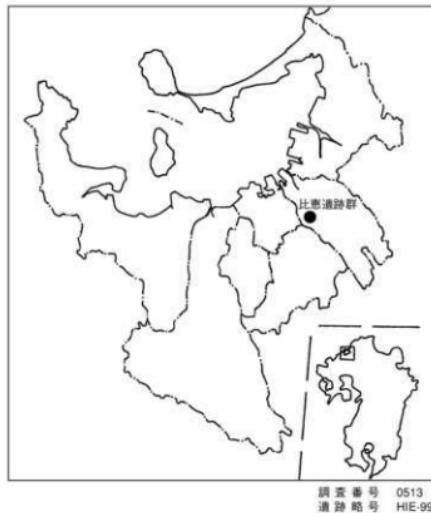
2007

福岡市教育委員会

比恵 46

—比恵遺跡群 第99次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第955集



調査番号 0513
道路略号 HIE-99

2007

福岡市教育委員会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる私たちの重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めているところであります。

本書は、平成17年度に実施した共同住宅建設に伴う比恵遺跡群第99次調査の成果を報告するものです。発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡、井戸、溝、青銅器の鋳型などが発見されました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　　言

- 本書は福岡市教育委員会が博多区博多駅南6丁目24-1,25-2番地内におけるビル建設に伴い、発掘調査を実施した比恵遺跡群第99次調査の報告書である。
- 本書に掲載した遺構実測図の作成は星野恵美、名取さつきが行った。
- 本書に掲載した遺物実測図の作成は本田浩二郎(p19~22)、西堂将夫・久住猛男(p29~36, 48)、常松幹雄(p38)、吉留秀敏(p46)、それ以外を名取、星野が行った。
- 本書に掲載した遺構・遺物写真の撮影は星野が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は本田(p19~22)、西堂・成清直子(p29~36, 48)、常松(p38)、吉留(p46)、それ以外を名取、星野が行った。
- 本書で用いた方位は磁北で、真北より6° 21' 西偏する。
- 遺構の呼称は井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ビットをSPと略号化した。
- 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 本書に記載する記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆は久住(p29~36, 48)、常松(p38)、吉留(p45~47一覧表)、それ以外を星野が行った。
- 本書の編集は星野が行った。

遺跡調査番号	0513		遺跡略号	HIE-99	
地番	博多区博多駅南6丁目24-1,25-2番		分布地図番号	東光寺37	
開発面積	870m ²	調査対象面積	506m ²	調査面積	462m ²
調査期間	平成18年4月25日~7月8日				

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 遺構と遺物	8
1) 竪穴住居跡	8
2) 井戸	17
3) 溝	24
4) 土坑	41
5) ビット出土遺物	44
6) 剥片石器	45
IV.まとめ	47

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

2004年10月5日、高見征義氏より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に博多区博多駅南6丁目24-1,25-2における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受け埋蔵文化財課では、書類審査を行った。結果、北西側では1997年に第62次調査、南東側では1992年に第45次調査が行われており、申請地に遺跡が遺存している状況であることが明確であった。それを受け、両者で協議を行った結果、建物建築部分の506m²を対象として記録保存のための発掘調査を実施することとなった。比恵遺跡群第99次調査は2005年4月25日から7月8日まで行った。

2. 調査の組織

調査委託：高見征義

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第1課）

調査総括：文化財課長（現 埋蔵文化財第1課長） 山口譲治

同課調査第2係長（現 埋蔵文化財第1課調査係長） 池崎謙二（前任） 山崎龍雄（現任）

調査庶務：文化財整備課管理係（現 文化財管理課管理係） 鈴木由喜

事前審査：同課事前審査係長（現 埋蔵文化財第1課事前審査係長） 清石哲也

同係（現 埋蔵文化財第1課事前審査係）主任文化財主事 吉留秀敏

同係（現 埋蔵文化財第1課事前審査係）文化財主事 本田浩二郎

調査担当：同課調査第2係（現 埋蔵文化財第1課調査係）文化財主事 星野恵美

調査作業：石橋テル子 近藤澄江 村田敬子 浦伸英 長野嘉一 本郷満子 関哲也 尊田絹代

宗像正勝 宮川ヤエ子 前田勉 中村桂子 徳山孝恵 富永美樹 山崎えい子

遠山歎 原勝輝 黒木三千男 更級成人 片岡博 三浦まり子 芹川淳子

整理作業：馬場イツ子 植口三恵子 西島信枝 松尾真澄 木本恵利子

発掘調査から報告書作成に至るまで高見征義氏をはじめとして、多数の関係者の皆様には多大なご理解とご協力を賜りまして、ここに謝意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

比恵遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置し、隣接する那珂遺跡群とともに東の御笠川と西の那珂川に挟まれた丘陵上に展開する遺跡である。那珂遺跡群とは東側から入る深い谷によって区分されている。比恵遺跡群の立地する丘陵は、かつての沖積作用による細かい谷が複雑に入り込む丘陵であり、今回の調査地点は丘陵の西斜面に位置している。また、この台地は南側の春日丘陵に連なり、那珂遺跡群の南側には五十川・井尻遺跡群が、さらに南側には須玖岡本遺跡を中心とする遺跡群が広がる。比恵遺跡群の立地する台地は花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上部に粗砂・細砂・腐植土層・阿蘇山の火碎流による八女粘土・鳥栖ロームが形成される。比恵遺跡群は主にこの鳥栖ローム層上面から掘削される。第99次調査もこの鳥栖ローム上で遺構検出をおこなった。

これまでの発掘調査では、縄文晩期終末から中世にかけて各時期の遺構・遺物が多量に出土した。遺物は、旧石器時代まで遡りナイフ型石器が出土する。縄文時代前期には、突帯文土器が出土するが、この時期の遺構は確認されていない。縄文時代晩期末から弥生時代前期になると遺構・遺物は台地北側・西側の縁辺部に多く分布する。弥生時代中期には、遺跡は台地のほぼ全域に拡大する。中期後半になると、大型の円形竪穴住居跡が出現し、後期には台地中央部を中心とした集落となる。この時期には銅鏡、青銅鋤先、鉄器が出土している。また、青銅器の鋳型・取瓶やガラス滓も出土しており、青銅器やガラス鋳造に携わった集団がいたことを示唆している。また、弥生時代中期後半から後期にかけて、大溝の一部が確認され、単位集落を囲むような環濠が確認されている。これとは別に、地形を無視した丘陵上を直線的に走る並列した2条の溝が発見されている。この2本の溝の間は、基本的に同時期の遺構が極めて少ない空閑地となっている。溝は、那珂遺跡まで続いており、丘陵上を南北に走り、延長1.5kmを超える。これは、舗装面こそ確認されていないが、道路状遺構の可能性が指摘されている。溝の掘削の上限は弥生時代後期葉であり、古墳時代初頭を通じて溝としての機能を果たしていたことが、出土土器からうかがえる。この時期の遺構は溝の外側に展開しており、その方位は溝の規制を大きく受けている。古墳時代後期には大型の掘立柱建物や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年(536)条に見える「那津官家」との関連が論じられている。古代になると、遺構は散在し、中世には筑崎宮の所領となる。

周辺の遺跡では、先に述べたように那珂遺跡群がすぐ南側に位置する。那珂遺跡群では、縄文時代晩期の二重環濠が発見され、さらに弥生時代前期から後期にかけても大規模な集落が展開する。特に、銅戈・銅劍の鋳型・鋳型中子等が出土し、弥生時代の青銅器生産の拠点といえる。また、三角縁神獸鏡が出土した那珂八幡古墳・阿蘇凝灰岩の石屋形をそなえた横穴式石室をもつ東光寺劍塚古墳の前方後円墳が位置する。東光寺劍塚古墳は福岡平野の首長墓の最後のものと位置づけられている。板付遺跡は最古の水田遺跡、弥生時代前期の環濠集落で、国指定史跡となっている。前期末の甕棺墓からは細形銅劍・銅矛が出土している他、後期の竪穴住居跡からは埋納されたと考えられる小銅鐸が出土する。さらに南側では井尻遺跡があり、ここでも弥生時代の集落と甕棺墓が検出され、青銅器生産関連遺物やガラス勾玉鋳型が出土し、工房があったと推定される。また、7世紀末から8世紀初頭になると台地中央部で寺院・官衙遺構が営まれている。「奴国」の中心とされる須玖岡本遺跡群、青銅器工房とされる室町遺跡、鉄器工房の赤井手遺跡がこの台地の南側に続く。御笠川の東側では、空港の敷地内で雀居遺跡・下月隈遺跡群が調査され、縄文時代晩期から弥生時代の集落、墓地、水田が見つかっており、湿地からは短甲・盾などの武具、机、斧の柄などの木製品が出土している。

参考文献 久住猛男「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学 第74号』1999年九州考古学会



1 比恵遺跡群	7 板付遺跡	13 麦野 A 遺跡	19 下月隈 B 遺跡群	25 上车田遺跡
2 那珂遺跡群	8 高畠遺跡	14 井相田 C 遺跡	20 天神森遺跡群	26 東比恵三丁目遺跡
3 東那珂遺跡	9 諸岡 A 遺跡	15 井相田 D 遺跡群	21 宝満尾遺跡	27 鶴居遺跡
4 五十川高木遺跡	10 井尻遺跡	16 立花寺 B 遺跡群	22 席田大谷遺跡群	
5 諸岡 B 遺跡	11 笹原遺跡	17 下月隈 C 遺跡群	23 久保園遺跡	
6 那珂君休遺跡	12 三筑遺跡	18 上月隈遺跡群	24 席田青木遺跡群	

Fig. 1 比恵遺跡群位置図 (1/25,000)

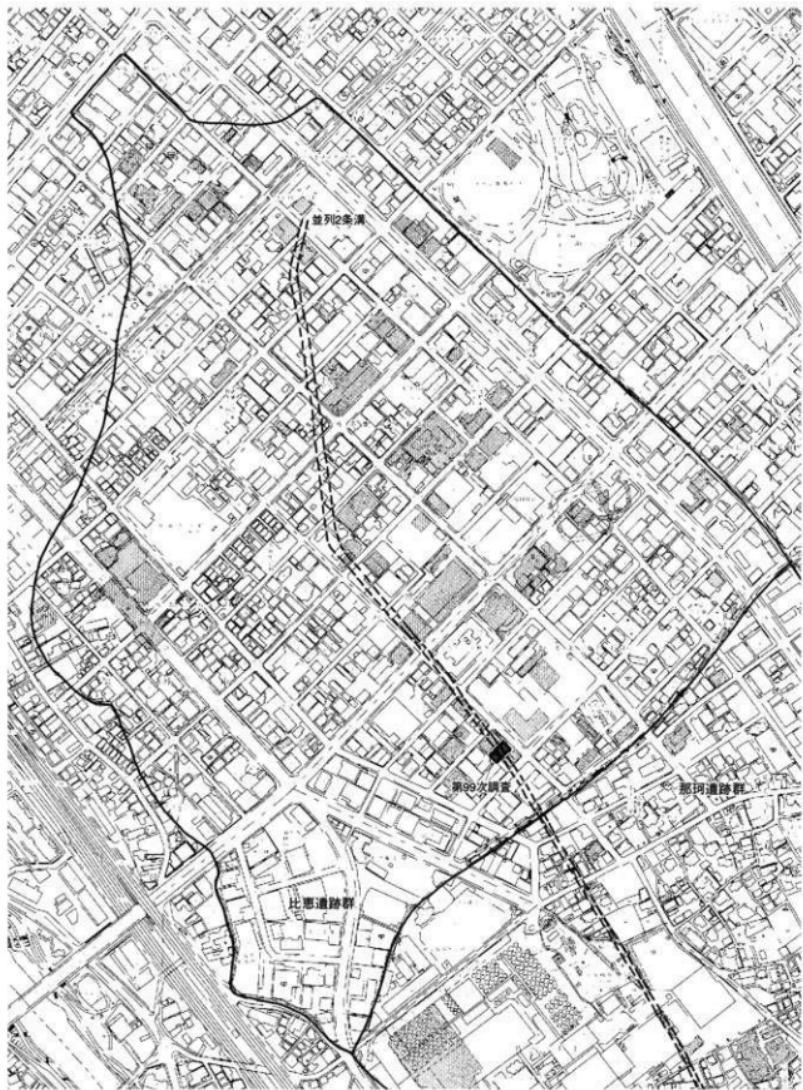


Fig. 2 比恵遺跡群調査区位置図 (1/6,000)

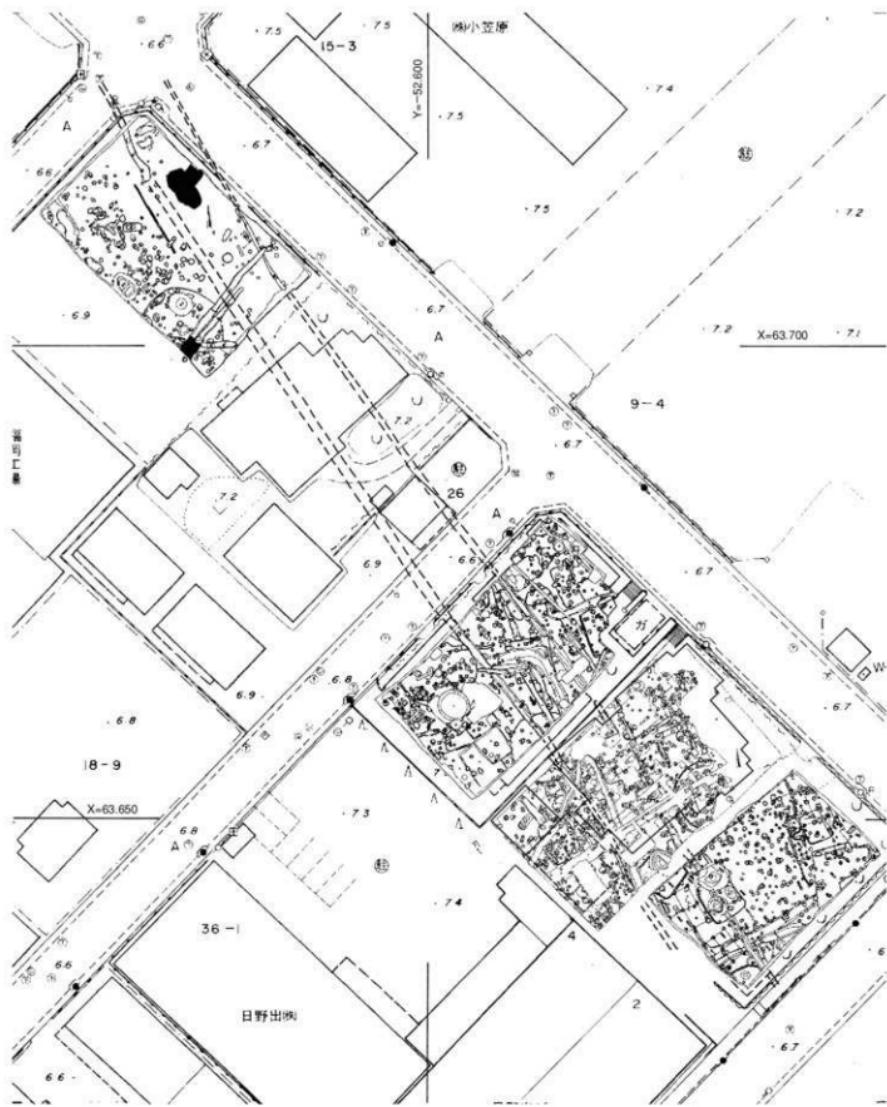


Fig. 3 第99次調査区位置図(1/500)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

第99次調査区は比恵遺跡群の南側に位置し、調査前の標高は約7.5mを測る。現況は宅地であり、ほぼ平坦であるが、東側の一部が約1m低く、標高6.7mを測り、道路面と同じ高さとなる。

第99次調査の北西側は1997年に第62次調査、南東側は1992年に第45次調査を行っている。今回のビル建築は、南東側の第45次調査地点を含めた範囲であったため、この地点を廃土置場とした。また、遺構面は表土直下であったため、表土剥ぎにおける廃土量も少なく、一度に全面を調査することができた。遺構面は標高7.2mを測り、ほぼ平坦である。現地表面は盛土であり、厚さは約30cmを測り、この盛土を除去すると、遺構面となる。遺構面は鳥栖ローム層上面である。検出した遺構はすべて、大きく削平され、遺存状況は悪い。主な遺構は弥生時代中期の竪穴住居跡2軒、溝1条、土坑1基、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡2軒、溝2条、古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、井戸1基、古墳時代中期の竪穴住居跡2軒、井戸1基、溝1条、古墳時代後期の溝2条、土坑1基を検出した。他に柱穴を多数検出した。また、弥生時代終末期の並行して走る溝2条は道路状遺構と指摘されている遺構である。遺物は弥生土器、須恵器、土師器が主体であり、他に石包丁や二次調整痕を有する黒曜石等の石器が出土する。他に弥生時代中期後半の溝から鋳造鉄器、古墳時代中期の溝から銅戈の鋳型が出土した。

調査は2005年4月25日に、西側から重機による表土剥ぎを開始した。遺構精査、掘削を終え、高所作業車による全景写真撮影を行った。併せて遺構実測を行い、2005年7月8日に調査を完了した。調査面積は462m²である。



Ph. 1 調査区全景（南から）

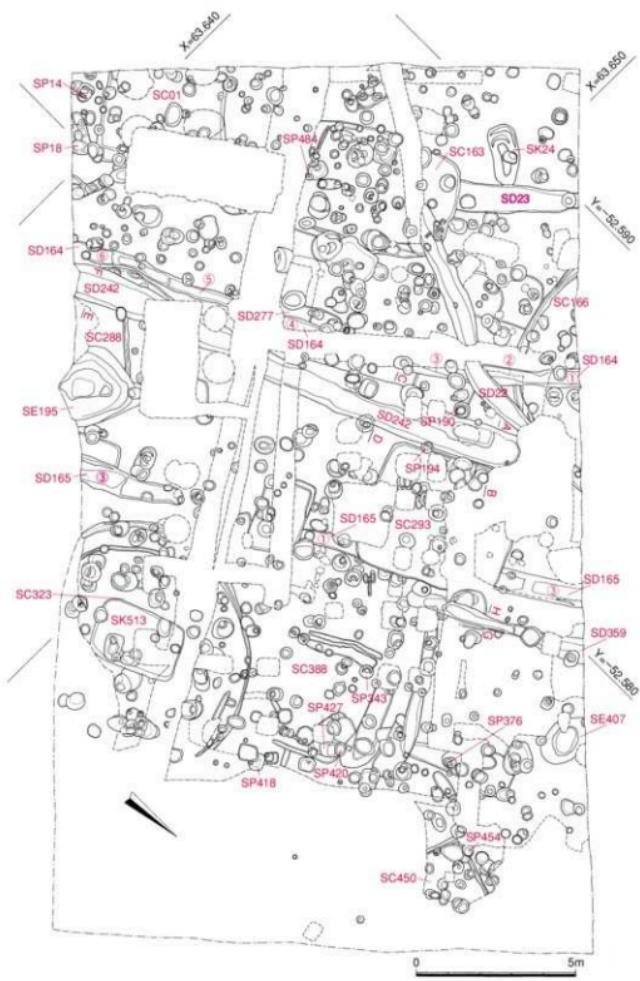


Fig. 4 第99次調査区構造配置図 (1/150)

2. 遺構と遺物

1) 壁穴住居跡

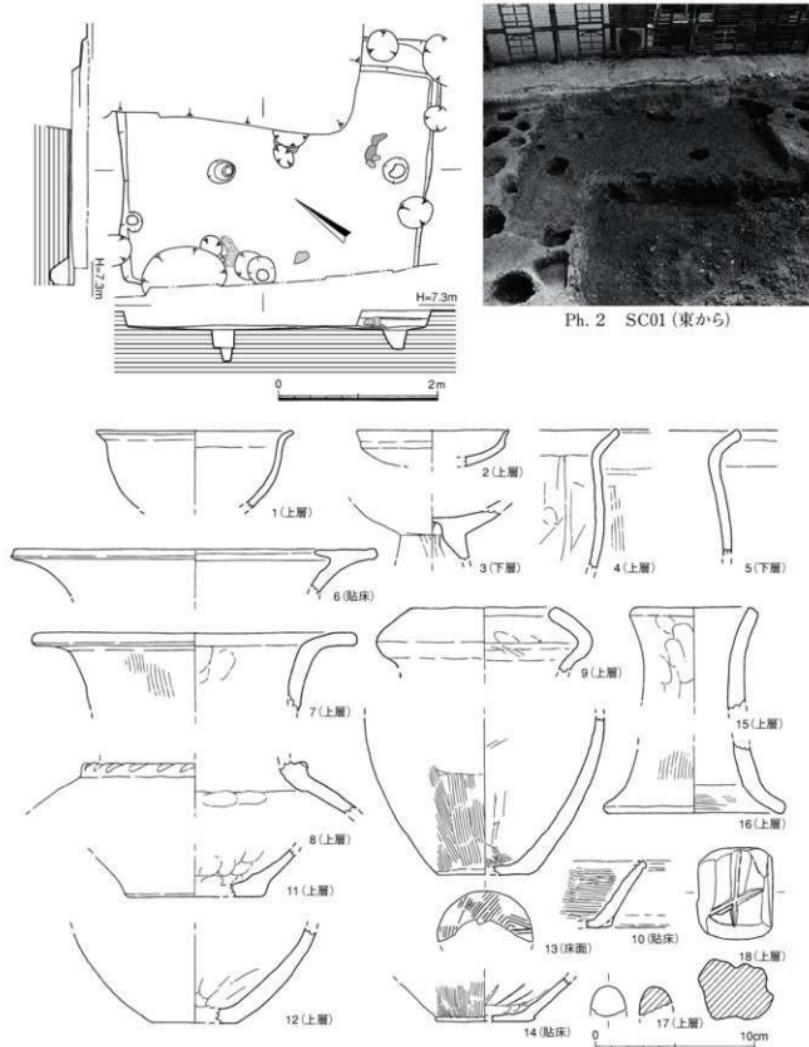


Fig. 5 SC01 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)

弥生時代中期の円形竪穴住居跡2軒、弥生時代終末～古墳時代初頭の方形竪穴住居跡2軒、古墳時代前期の方形竪穴住居跡2軒、古墳時代中期の方形竪穴住居跡2軒を検出した。遺存状況はいずれも悪く、ベッド状造構等は大半が削平されていると考えられる。

SC01 (Fig. 5 Ph. 2) 調査区西側に位置する方形の竪穴住居跡である。東側は防空壕に削平され、西側は調査区外へ延びる。南北方向は約3.9m、東西方向は3.1mを測り、長方形をなす。残存壁高は約20cmである。ベッド状造構は東側で検出するが、現況で幅は30cm、高さは10cmである。黄褐色土で構築しており、本来西側へ延びていた可能性も考えられる。現在は遺存していないが、本来他の箇所にもベッド状造構を敷設していたものと考えられる。周溝は検出していない。床面には白色粘土と焼土が点在するが、集中はしていない。また、西側に小砾と砂が広がっている箇所を検出した。主柱穴は北側と南側の2本と思われ、直径30～35cm、深さは24cm、45cmを測る。覆土は黒褐色土で、明黄橙色土が斑状に混入する。遺物は弥生土器、土師器が主体で、他に須恵器、砥石、磨石、黒曜石の剥片が

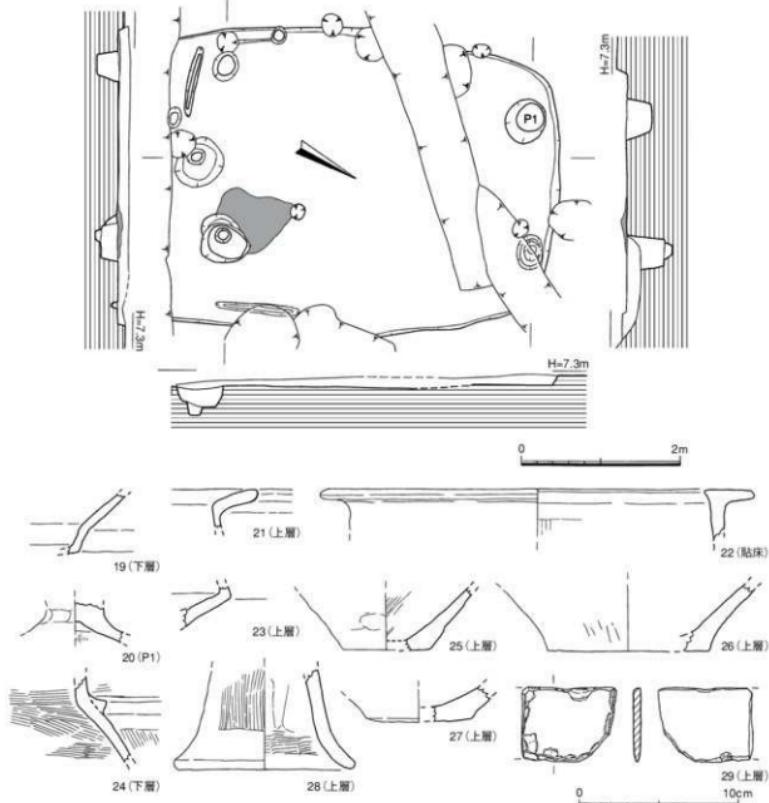


Fig. 6 SC163 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)

出土する。弥生時代中期から古墳時代前期の土器が出土するが、住居の時期は床面直上の遺物から弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

出土遺物 (Fig. 5) 1は鉢である。外面ともに磨滅し、黄橙色を呈する。2は土師器の器台である。3は土師器の高环で、内外面ともに磨滅し、橙色を呈する。4・5は甕の口縁部片で、口縁部は緩やかに外反し、端部は平坦である。ともに磨滅は著しいが、内面にはわずかに指押さえの跡が残る。6は胎土に赤褐色粒を多く含む。6・7は弥生土器の広口壺の口縁部片である。6は胎土に金雲母、赤褐色粒を多く含み、白橙色を呈する。7は白色砂粒を多く含み、黄橙色を呈する。8は壺の肩部片である。胴部と頸部の境には薄帶状の粘土帯を貼付し、斜方向の刻み目を施す。白色砂粒を多く含み、金雲母を少量含む。橙色を呈する。9は袋状口縁壺の口縁部片である。口縁内面に緩い稜をもつ。10は二重口縁壺の口縁部片である。内面は横方向の刷毛目で調整する。11～14は底部片である。11は底部と胴部の境目がわずかに残るが、12・13は境目が不明瞭となる。内面はいずれも指ナデで調整されるが、13は刷毛目調整も施される。また、13は底部外にも密な刷毛目が残る。14は比較的器壁が薄く、外面は縱方向の刷毛目が施され、内面には工具痕が残る。15・16は弥生土器の器台である。17は磨石の破片で、研磨痕が残る。重さは6.31gである。18は砂岩製の荒砥石である。側面の4面に溝状の凹みをもつ。

SC163 (Fig. 6 Ph. 3) 調査区西側に位置する方形の竪穴住居跡である。南側は現代の側溝に削平される。東西方向は3.8m、南北方向は現存で4.8mを測り、長方形をなす。残存壁高は約10cmである。周溝は東側と南側の一部で検出している。幅10cm、深さは3～10cmである。床面の南東側に焼土が広がっており、厚さは7cm程度である。これに伴うピットは検出していない。主柱穴は4本と思われ、直径30～60cmの楕円形を呈しており、深さは25～55cmを測り、深さにもややばらつきがある。遺物は弥生土器が主体で、他に二次調整を有する黒曜石の剥片（6）剥片石器参照）が出土する。土師器の混入があるが、住居の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と思われる。

出土遺物 (Fig. 6-37) 19は二重口縁壺の口縁部片である。器壁は薄く、直立気味に立ち上がるが、中位で屈曲し、口縁部に至る。橙色を呈し、細かい砂粒を含む。20は高环の脚部片で、脚部は低く、基部付近から大きく外側に開く。明橙色を呈し、内面にわずかに刷毛目調整が残る。21・22は甕の口縁部片で、21は「く」字状を呈し、緩い稜線をもつ。22は貼床から出土したもので、鋤先口縁をもつ弥生土器である。23は袋状口縁壺の口縁部片で、内外面に明瞭な稜線をもつ。24は壺の肩部片で、突帶を貼付する。内面は横方向、外面は縱方向の細かい刷毛目で調整される。25～27は底部片で、25・27は底部と体部の境目が不明瞭である。28は器台で、明橙色を呈し、刷毛目調整が施される。29は細粒砂岩の未成品で、周縁部に剥離痕がみられる。重さは25.33gである。

SC166 (Fig. 7 Ph. 4) 調査区中央に位置する円形の竪穴住居跡である。現代の側溝や弥生時代



Ph. 3 SC163 (東から)

Ph. 4 SC166 (南から)

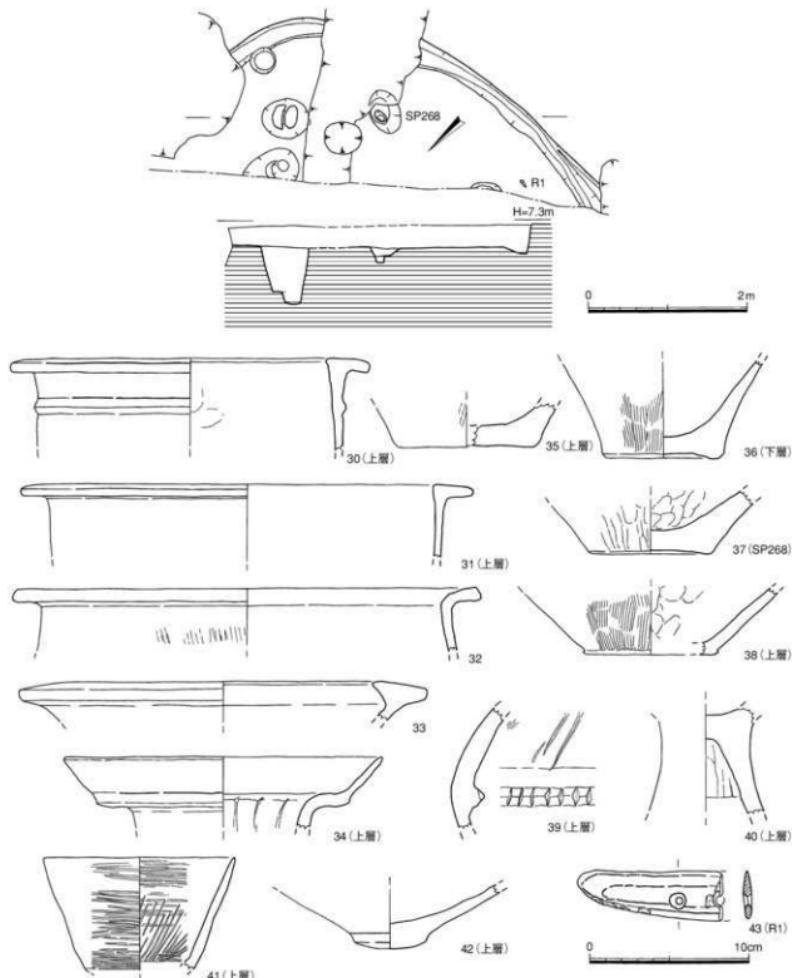


Fig. 7 SC166 実測図(1/60) および出土遺物実測図(1/3)

終末の溝に部分的に削平され、北側は調査区外へ延びる。直径は6m以上を測り、円形をなす。残存壁高は最も遺存している部分で約30cmである。西側の調査区付近で、段を有するが、これがベッド状遺構となる可能性もある。周溝は幅35cm、深さ38cmを測り、全周する。柱も円を描くように配される。柱穴の平面プランは直径35～60cmの楕円形を呈し、最深で72cmを測る。覆土は上層に黒褐色土、下層に黄褐色土が堆積する。遺物は弥生土器が主体で、SD164の混入と思われる土師器が出土する。他に、床

面から28cm浮いた状況で石包丁、黒曜石の剥片が出土し、住居跡の時期は弥生時代中期後半である。

出土遺物 (Fig. 7) 30～32は甕である。30・31は垂下した鋸先口縁をもち、30は口縁下に1条の三角尖帯を巡らす。胎土に赤褐色粒を多く含み、褐色を呈する。32の口縁部上面は中程で凹み、端部にかけて肥厚する。外面にはわずかに縦方向の刷毛目調整が残る。胎土に金雲母を含み、色調は明橙色である。33は垂下する口縁部をもつ広口壺である。器面は荒れ、調整は不明である。34は二重口縁壺の口縁部片である。直立する頸部から屈曲し、端部は大きく外に開く。胎土は細かい砂粒を含み、色調は橙色を呈する。35～38は底部片である。平底を呈し、外面は刷毛目、内面は指ナデ、指押さえで調整する。39は体部片で、粘土を貼付し、刻目を施す。胎土に白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。40は高壺の脚部片である。基部は太く、脚部は綏やかに広がる。41・42は土師器である。41は小型丸底壺で、内外面に横方向の細かい磨きを施す。体部内面には斜方向の暗文が残る。胎土は細かく、色調は明褐色を呈する。42はレンズ状の底部をもつ甕である。内外面ともに磨滅し、調整は不明である。43は石包丁の欠損品である。細粒砂岩製で、刃部は磨滅する。重さは19.63gである。

SC288 (Fig. 8) 調査区中央に位置する方形の竪穴住居跡である。北側の壁が一部遺存する状況で、大きく削平される。東側はSE195、西側はSD242に削平され、南側は第45次調査のSB03に続く。SB03は東西方向の長さ4.1mを測り、主柱穴を構成すると想われる2本の柱穴を検出している。今回検出した竪穴住居跡と合わせると、南北方向の長さは3.7m、残存壁高は15cm、周溝は幅15cm、深さ17cmを測る。また、西側の床面で焼土が広がっており、その直下に直径30cm、深さ6cmのピットを検出した。SC288の床面では柱穴は確認できなかった。土師器、弥生土器が出土するが、遺物量は少なく、小片ばかりであるため、時期は確定できないが、古墳時代前期と思われる。

出土遺物 (Fig. 8) 44は鉢で、口縁部は内湾気味に延びる。胎土は精良で、器面は荒れているが、内面に一部研磨痕が残る。色調は明橙色を呈する。45は貼床から出土した甕の口縁部片で、口縁は強く外反し、内面の稜線が明瞭である。46は甕の平底の底部片である。

SC293 (Fig. 9 Ph. 5～8) 調査区中央に位置する方形の竪穴住居跡である。北側は側溝によって削平を受けており、南側も現代の建物の基礎で壊されている。南北方向は約4.6m、東西方向は4.1mを測り、長方形をなす。残存壁高は最も遺存している部分で約15cmである。主柱穴は4本で構成され、直径33～55cm、深さ10～50cmを測る。床面には北側と東側の2箇所に白色粘土が広範囲に広がっていた。覆土と思われる白色粘土を除去すると、東側から甕を検出した。甕は西側の壁面の中央部分に敷設されていた。両袖とともに良好に遺存するが、天井部は崩落していた。袖は貼床の上に微量の暗褐色土が粒状に混入する白色粘土で造られ、基部で幅25cm、高さ13cmを測る。袖の間隔は基部で41cm、先端部で65cmを測り、外側に開く。燃焼部は直径45～50cmの円形を呈しており、5cm程浅く掘り窪められ、赤褐色土が堆積する。両袖の内部には上層にまとめて白色粘土、その下ににぶい黄褐色土・炭化物・焼土が堆積し、床面に至る。上層の白色粘土は甕の天井部が崩落したものと思われる。また、床面

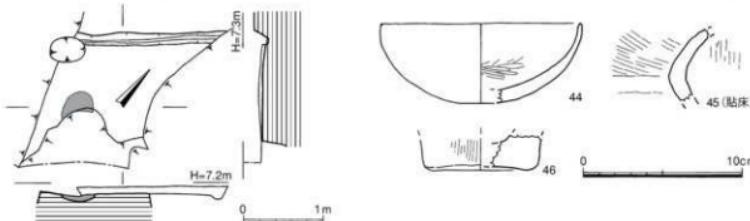


Fig. 8 SC288 実測図(1/60) および出土遺物実測図(1/3)

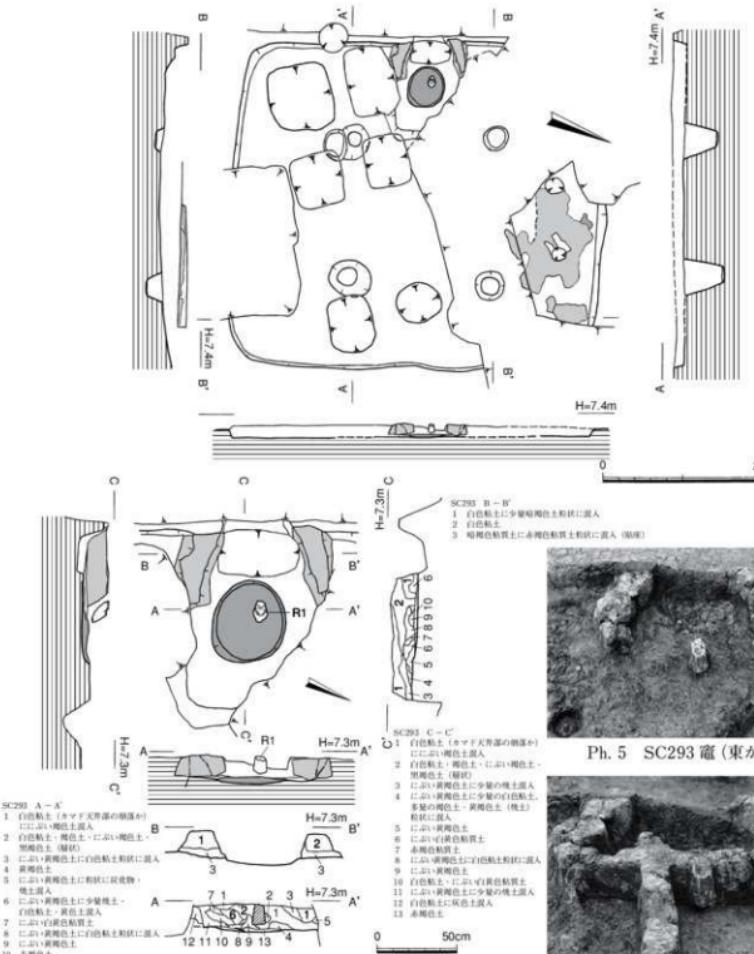


Fig. 9 SC293 実測図 (1/60, 1/30)



から2cm程浮いた状態であるが、燃焼部から支脚を検出した。遺物は須恵器、土師器が出土する。遺物は古墳時代中期のものが主体であるためこの時期と思われる。

出土遺物 (Fig. 10) 47～55は須恵器である。47～50は壺蓋である。47の口縁端部は丸くおさめ、48は口縁部を端部で折り曲げ、天井部は平坦で、ナデを施す。49・50は丸い天井部をもち、口縁部内面に沈線状の段を有し、天井端部に沈線を1条巡らす。51是有蓋高环の壺部片である。52は高台付壺である。高台は底部と体部の境に貼付される。焼成は不良で、灰白色を呈する。53は壺の底部片で、底部内

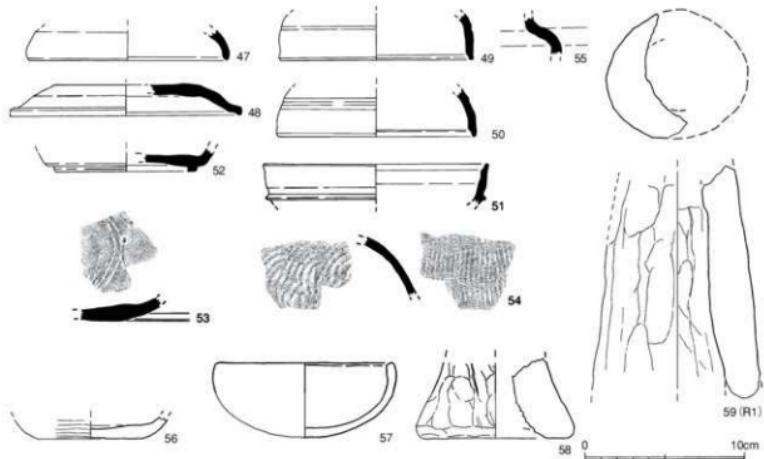


Fig.10 SC293 出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 7 SC293 (東から)



Ph. 8 SC293 白色粘土検出状況 (東から)

面には円弧の當て具痕が残る。底部は回転ヘラ削りを施す。54は甕の体部片で、外面は叩きの後、横向の回転ナデを施す。55は脛の体部片と思われる。内外面ともに回転ナデで調整される。56・57は土師器である。56は壺で、底部はナデで調整する。57は丸底の鉢である。器面は磨滅し、調整は不明である。58・59は支脚である。いずれも器壁が厚く、指ナデで調整される。58は多量の角閃石と赤褐色粒を含む。59は竈内部から出土したものである。外面は著しく磨滅する。

SC293 (Fig 11 Ph. 9) 調査区東側に位置する円形の竪穴住居跡である。南側と東側は既に削平を受ける。直径は8m以上を測り、円形をなす。残存壁高は最も遺存する部分で約10cmである。周溝は幅15~30cm、深さ20cmを測り、全周する。また、東側では55cm内側に同様の弧を描く周溝を検出した。長さ2.5m、幅13cm、深さ3cmである。北側でも一部同様の周溝を検出する。中央部はSK513に削平される。その周辺を主柱穴が直径6mの円を描くように配され、柱間は約1.5mを測る。主柱穴は直径

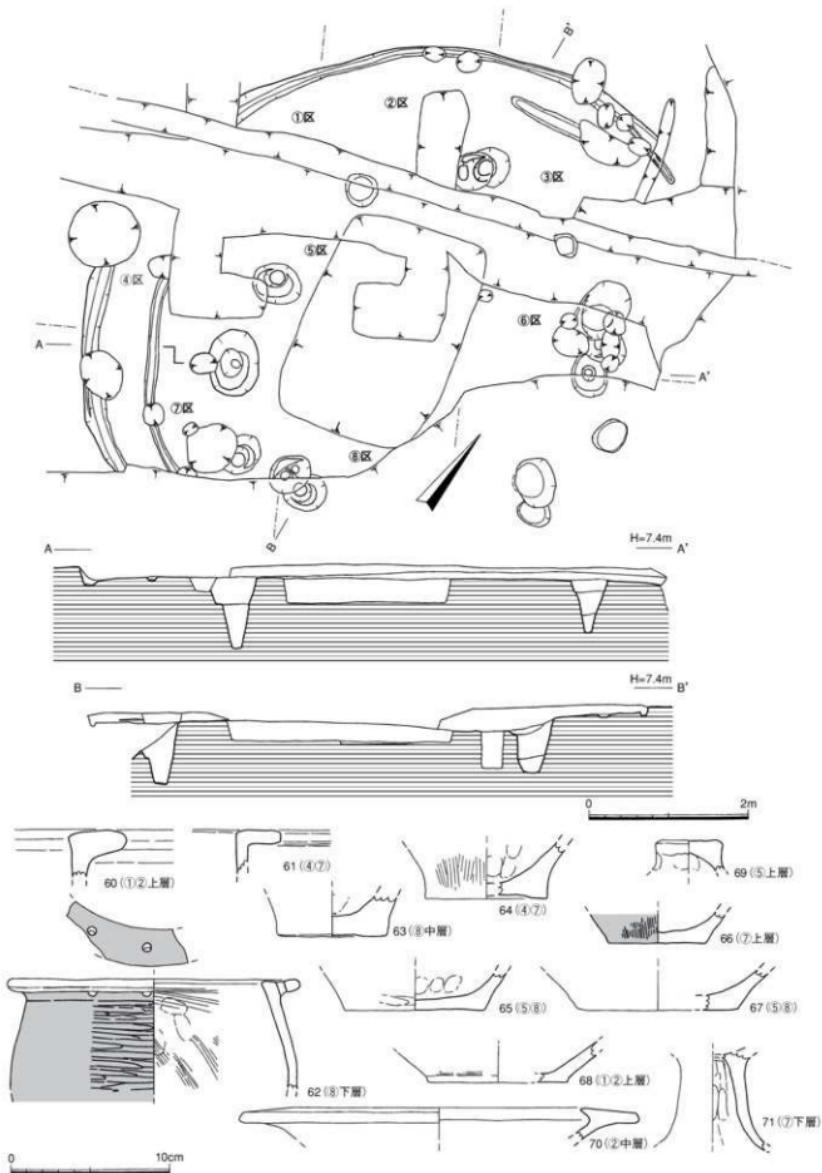


Fig.11 SC323 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)

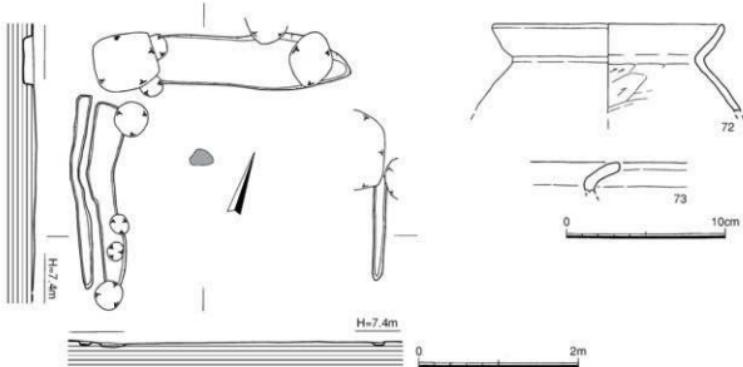


Fig. 12 SC388 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 9 SC323 (南から)



Ph.10 SC388 (南から)

25 ~ 83cm の楕円形を呈し、最深で 70 ~ 90cm を測る。柱は切り合うものが多く見られることから住居の建て替えが行われた可能性が考えられる。遺物は小片が多いが、弥生土器が主体で、南東側(⑦区)からまとまって黒曜石の石錐、くさび形石核、二次調整を有する剥片(6) 剥片石器参照が出土する。時期は弥生時代中期中葉である。

出土遺物 (Fig. 11-37) 60・61は逆「L」字状の口縁を有する甕である。60は肥厚し、61の上面は平坦である。胎土に赤褐色粒を含み、橙色を呈する。62は無頸壺で、口縁部の中央に径5mmの穿孔を3.1cmの間隔で対峙する位置に穿つ。内面は刷毛目と指押さえて調整され、外面は横方向の研磨で仕上げる。口縁部上面と体部外面に赤色顔料が残る。胎土は金雲母を含み、精良である。63 ~ 68は底部片である。いずれも平底で、66は外面に赤色顔料が塗布される。64・66・67は胎土に角閃石、すべてに金雲母を含む。調整は外面が縦方向の刷毛目、内面が指ナデ、指押さえて調整される。69は蓋である。天井部は低く、ナデと指押さえて整形される。胎土には金雲母、赤褐色粒を含み、色調は明橙色である。70・71は高环である。70は坏部で、鋤先口縁が長く垂下する。胎土に金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を多く含み、色調は明橙色を呈する。71は脚部片で、太く、短い。外面は磨滅し、調整は不明である。内面には

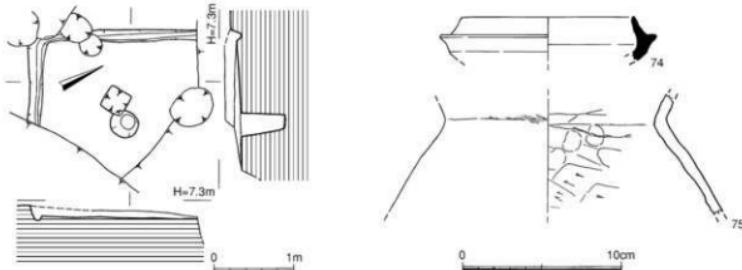


Fig.13 SC450 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)



Fig.11 SC450 (東から)

穴は不明である。出土遺物は小片ばかりであり時期が確定できないが、古墳時代前期と思われる。

出土遺物 (Fig. 12) 72-73は甕の口縁部片である。72の口縁は内湾気味に外傾し、端部は丸くおさめる。外面は著しく磨滅するが、体部内面はヘラ削りの調整が残る。73の口縁部は直線的に外傾し、端部付近は強い横ナデを施す。ともに白色砂粒を含み、72は橙色、73は明橙色を呈する。

SC450 (Fig. 13 Ph. 11) 調査区西側に位置する方形の竪穴住居跡である。東側と南側は削平されている。残存壁高は最も遺存している部分で約13cmである。周溝は幅12~20cm、深さ18cmを測り、全周する。主柱穴は不明である。遺物は須恵器・土師器が出土するが、遺物量は少なく、小片ばかりである。時期は古墳時代中期と思われる。

出土遺物 (Fig. 13) 74は須恵器の壺身である。立ち上がりを有し、器壁は厚い。胎土は細かい砂粒を含み、色調は灰橙色を呈する。焼成は悪い。器面は磨滅し、調整は不明である。75は土師器の甕である。口縁部は「く」字状を呈し、緩く外反する。肩は張らずにそのまま体部に至る。体部内面は横方向のヘラ削りで調整され、外面は磨滅するが、頸部付近に刷毛目調整がわずかに残る。白色砂粒、金雲母を多く含み、色調は橙色を呈する。

2) 井戸

古墳時代初頭の井戸1基、古墳時代中期の井戸1基を検出した。遺存状況は比較的良好で、土器が大量に廃棄された状況であった。

指ナデが残る。胎土に金雲母を含み、色調は橙色である。

SC388 (Fig. 12 Ph. 10) 調査区西側に位置する方形の竪穴住居跡である。遺存状況は悪く、周溝と思われる溝と床面を検出した。南北方向に走る周溝間の幅は約3.5mを測り、その間は、暗褐色土を呈する覆土が厚さ2cm程堆積し、貼床の可能性がある。また、わずかであるが、焼土の広がりも見られた。厚さは3cm程である。周溝の幅は15cm、深さは3~5cmである。北側部分の溝は幅60cm、深さ13cmを測り、他の周溝とは異なるが、ここで、貼床は切れるこ

とから周溝の可能性は捨てきれない。主柱

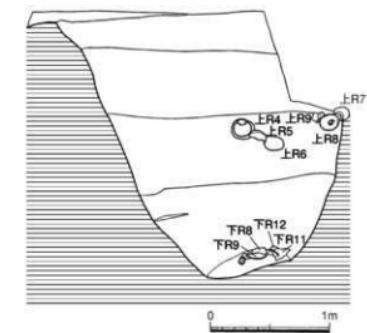
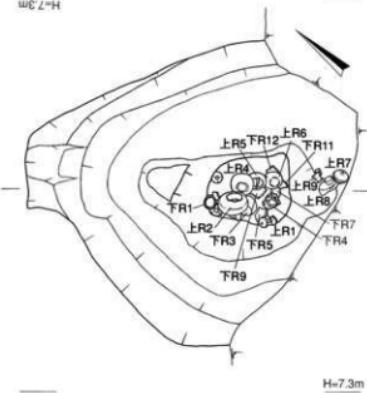


Fig.14 SE195 実測図 (1/40)



Ph.12 SE195 (南から)



Ph.13 SE195 上層遺物出土状況 (東から)



Ph.14 SE195 下層遺物出土状況 (西から)

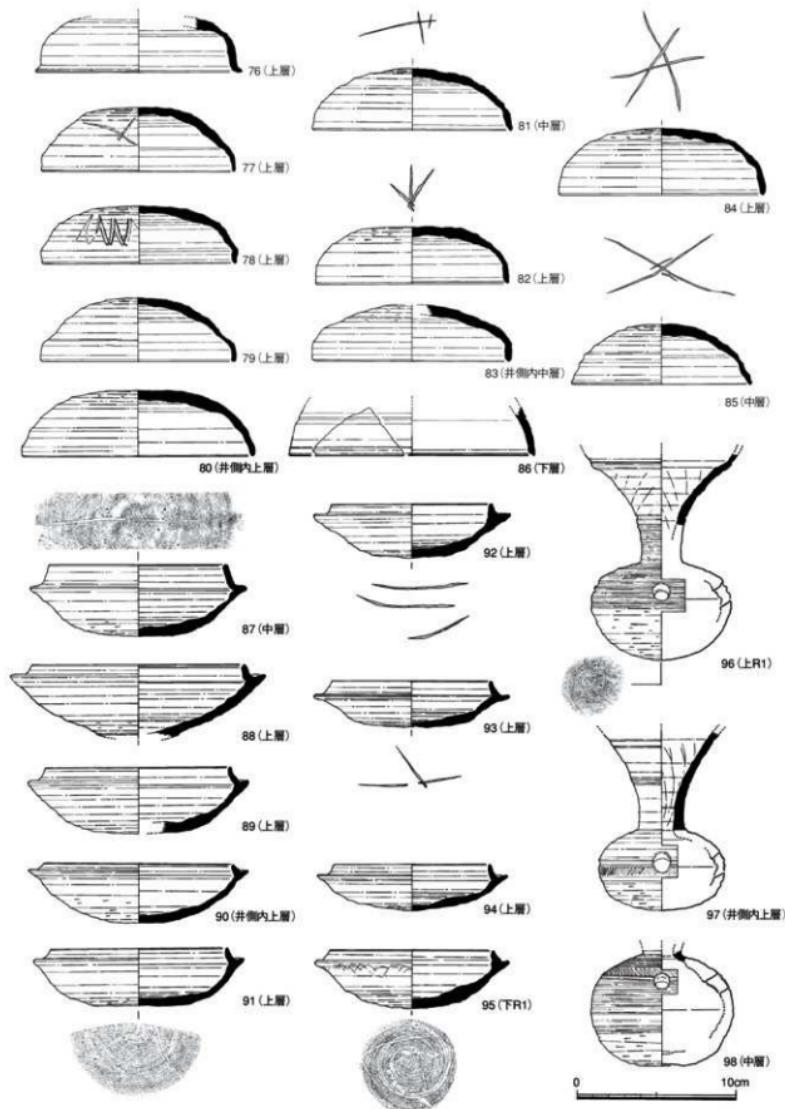


Fig.15 SE195 出土遺物実測図① (1/3)

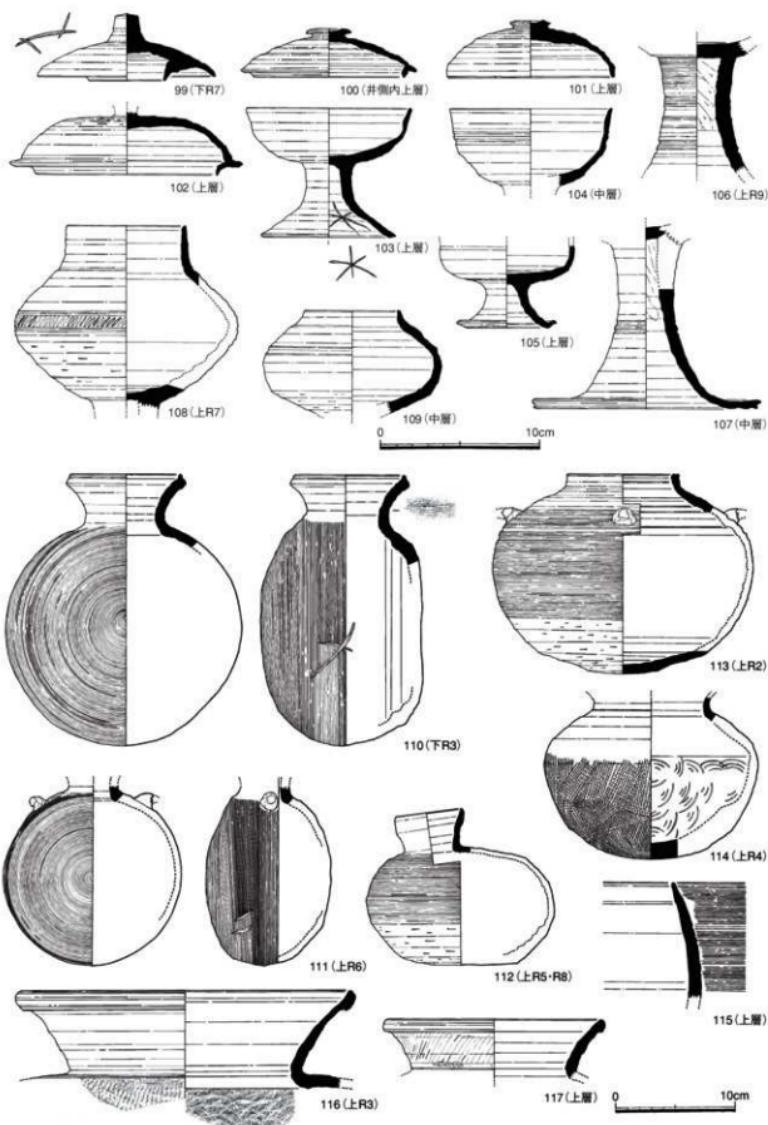


Fig.16 SE195 出土遺物実測図② (1/3・1/4)

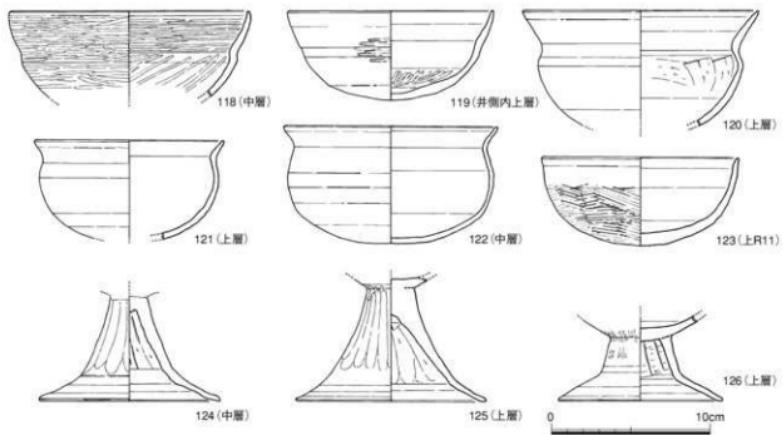


Fig. 17 SE195 出土遺物実測図③ (1/3)



Ph.15 SE195 出土遺物

SE195 (Fig. 14 Ph. 12 ~ 14) 調査区中央に位置し、南側は削平を受ける。井戸掘方の平面プランは東西方向2.5m、南北方向約2.8m以上を測り、楕円形をなす。深さは2.5mを測る。底面は東西方向0.9m、南北方向約1.65mを測り、歪な楕円形状を呈する。素掘りの井戸で、湧水はない。遺物が大量に投棄されており、深さ1m、2mの2箇所に集中していた。上層・下層からは須恵器、土師器、砾石が出土する。布留式土器等は上層から出土し、混入と思われる。一括出土した上層・下層の遺物はほとんど時期差がみられない。時期は古墳時代中期である。

出土遺物 (Fig. 15 ~ 18 Ph. 15) 76 ~ 117は須恵器である。76 ~ 86は壺蓋である。76 ~ 85は天井部から口縁部にかけて丸くならかなカーブを描く。口縁端部も内面に段をもたず、丸く仕上げる。天井部外面は1/2未満の範囲が回転ヘラ削りによって調整されるが、部分的にナデ調整を施すものもある。76の口縁部は外側に引き出され、端部は平坦である。胎土は精良で、色調は外面が光沢を帯びた灰色、内面は口縁部が灰色、体部は小豆色を呈する。77の器面は滑らかであるが、焼成は悪い。78は胎土に黒色、白色砂粒を含み、灰色を呈する。79・80の色調は灰色、一部小豆色を呈する。81は器壁が厚く、82は大粒の白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。86は口縁端部に内傾する明瞭な段を有し、天井端部に沈線を巡らし、稜をつくる。胎土は精良で、色調は灰色を呈する。焼成は堅緻である。87 ~ 95は壺身である。壺蓋と同様、底部外面は1/2未満の範囲が回転ヘラ削りによって調整されるが、部分的にナデ調整を施すものもある。87 ~ 89は立ち上がりが比較的長く、身は深い。87は器壁が厚く、胎土には黒色粒を多く含み、灰色を呈する。88の胎土は精良で、器面は滑らかである。色調は灰白色を呈する。90 ~ 95は器高が低く、やや扁平となる。また、立ち上がりは短く内傾し、端部は丸くおさめる。90は赤褐色粒を多く含み、橙色を呈する。91・92は灰色、93は白灰色を呈する。92・93は胎土に黒色粒を含み、焼き膨れ、焼き垂みが生じている。94は灰色、一部赤褐色を呈する。95は器壁が厚く、体部上位に1/3周程、工具

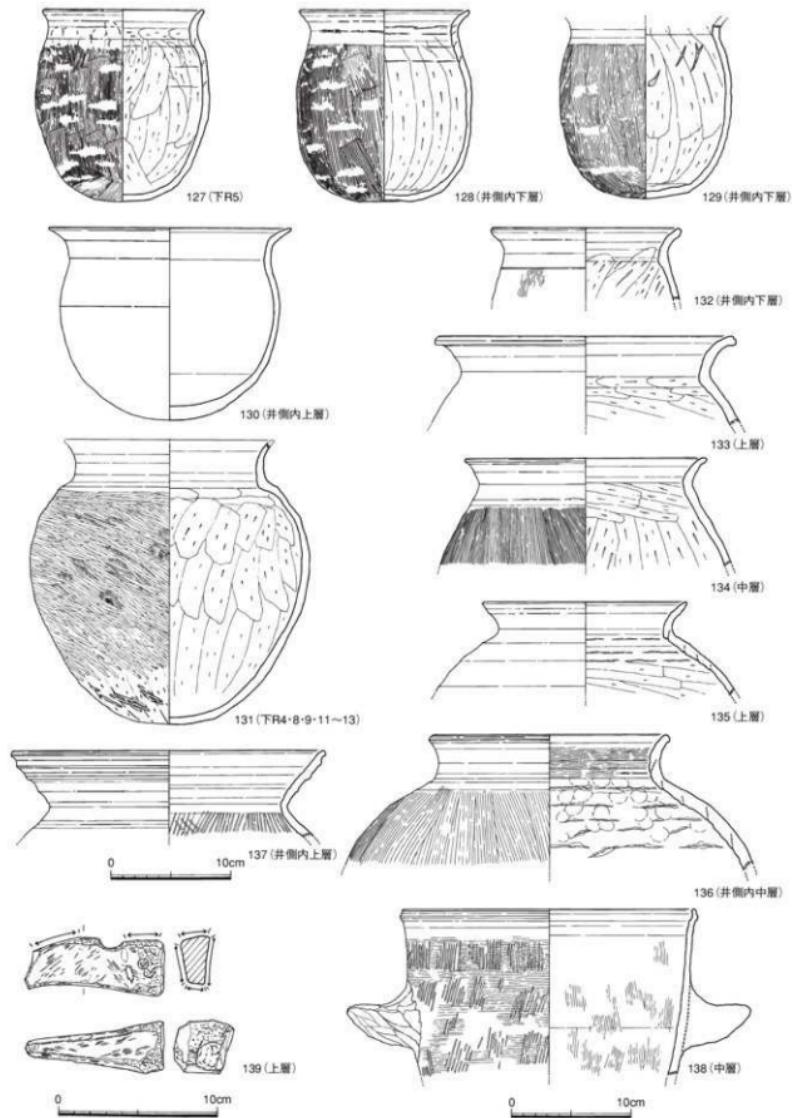


Fig.18 SE195 出土遺物実測図④ (1/3・1/4)

痕が残る。96～98は甌である。基部が細く、頸部はラッパ状に外反する。96の底部は丸く、97・98は平底を呈する。96・97は最大胴部径に、98はその上位に円孔を外上方から下内方に穿孔する。99は台付長頸壺の蓋で、返りを内面に有する。100・101は高杯の蓋で、つまみは低く、上面は凹状を呈する。100は返りを有し、砂粒が多く器面がざらつく。焼成は悪い。102はつまみが欠損している蓋と思われるが、異物が融着している可能性もありその場合壺の可能性も捨てきれない。黒色粒を含み、灰黒色を呈する。焼成は良好であるが、焼き彫れが生じる。103～107は高杯である。103～105は無蓋高杯で、脚部の基部は太く短い。104・105は杯部中位に沈線が巡る。103・104は焼成が良好で、灰色、一部小豆色を呈する。105は胎土に白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。106・107は長脚で、106は基部が太く、107は比較的細い。中位に2本の沈線を巡らせる。108・109は無蓋台付短頸壺で、脚部は欠損する。108はやや頸部が長く、内傾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。110・111は提瓶である。110の体部前面は丸みをもち、背面は直線的である。頸部と側面の2箇所にヘラ記号を有する。111は体部側面肩部にカギ形の把手が付く。体部は全面カキメで調整される。112は平瓶で、丸みをもつ体部は、上半がカキメ、下半が削りで調整される。113・114は壺である。113は四耳壺で、肩部に4箇所カギ形の把手が付くが、いずれも欠損する。肩部から体部中位にかけては3箇所凹線が巡る。体部上半がカキメ、下半はヘラ削りで調整される。口縁は短く直立し、端部は平坦である。114は小型の壺で、口縁部を欠損する。器壁が厚く、丸底を呈する。胎土には黒色粒を含む。115は鉢と思われ、口縁は内傾する。色調は橙色である。116・117は甌で、116は赤褐色、117は灰色を呈する。118～138は土師器である。118～120は小型丸底壺で、混入品と思われる。118は両面ともに細かい研磨調整、内面には暗文風の磨きを施す。119は器面の磨滅が著しいが、わずかに研磨痕が残る。120は外反気味に延びる口縁部をもつ。121～123は鉢で、胎土に赤褐色粒を含み、橙色を呈する。121・122は短い口縁をもち、123は器壁が厚く、外面は叩きで調整する。124～126は高杯で、124・126は胎土に赤褐色粒を含み、色調は橙色である。126は短い脚部が中位から大きくなっている。外面には縱方向の刷毛目調整がわずかに残る。127～134は甌である。127～129は底部が平底を呈し、外面は細かい刷毛目、内面は削りで調整される。127は外面下間に煤が付着する。130～134は外反する口縁部をもつ。130・131の底部は丸底で、130の器面は磨滅し、131の外面は刷毛目の後、磨き状のナデ、内面は削りで調整される。胎土に赤褐色粒を多く含み、色調は明褐色を呈する。132の外面は口縁部から体部にかけて煤が付着する。135～137は壺で、丸みをもつ体部に口縁部が緩やかに外反する。136は器壁が厚く、粗い調整のため粘土帶の痕跡が残る。137の内面は縦方向の粗い刷毛目で調整される。138は甌で下半は欠損する。外面は横方向の刷毛目調整の後、部分的に叩き、ナデが施される。内面は縦方向の刷毛目で調整される。139は粘土岩製の砥石で、2箇所に凹みをもち、その内面にわずかに磨きが残る。全面が砥面として使用され、擦痕が残る。

SE407 (Fig. 19 Ph. 16) 調査区西側に位置し、北側は調査区外へ延びる。井戸掘方の平面プランは南北方向約1.8m、東西方向1.2mを測り、楕円形をなす。深さは1.9mを測る。底面は南北方向0.95m、東西方向約0.55mを測り、楕円形を呈する。素掘りの井戸で、南側は深さ0.4m付近まで緩やかに落ちるが、そこから底面までは直に落ちる。北側も同様である。また、西側では一部オーバーハングしている箇所もある。湧水はない。遺物は底にまとまって投棄され、土師器、弥生土器、土製の投弾、黒曜石の二次調整を有する剥片(6)剥片石器参照)が出土する。時期は古墳時代初頭である。

出土遺物 (Fig. 20-37 Ph. 17) 140～150は土師器である。140～144は甌で、肩がやや張り、口縁部が内傾気味に立ち上がり、端部内側に段を有する。底部は尖底氣味である。体部外面上半は横方向、下半は縦方向の刷毛目、内面は削りと指押さえで調整する。142は肩部に縦方向の刷毛目調整が残る。体部下半外面には煤、内面には焦げが付着する。胎土は赤褐色粒、金雲母を含む。140は肩部に沈線を巡

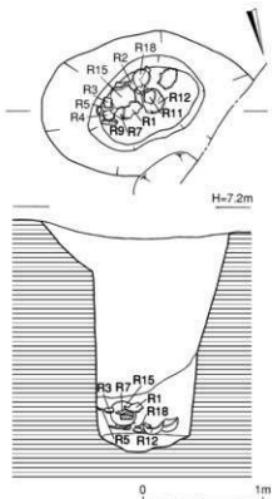


Fig.19 SE407 実測図 (1/40)



Ph.16 SE407 (北から)

らし、沈線は3/4周波状、1/4周直線状である。141の肩部は蛇行する沈線、144は波状の沈線を巡らす。145・147は高环である。145は坏部で、下位で屈曲し、大きく外側に開く。147は脚部片で、基部は太く、下位で大きく外側に開くと思われる。ともに胎土は赤褐色粒、金雲母を含む。146は器台の脚部片で、脚端部は丸く仕上げる。金雲母を含み、色調は橙色である。148～150は二重口縁壺の口縁部片である。148は直立する頸部で、上位部分で大きく外反し、口縁部は内側に強く屈曲する。白色砂粒、赤褐色粒を多量に含み、器面はやや磨滅する。149の口縁部は大きく外側に開く。150は0.8cmの竹管文を巡らす。胎土は細かい金雲母を含み、明橙色を呈する。151は壺の口縁部片である。口縁は体部から強く屈曲し、外面には多量の煤が付着する。152は投弾で、重さは16.54gを量る。長さは3.65cmを測り、断面は円形を呈する。褐色を呈し、器面は滑らかに仕上げる。

3) 溝

弥生時代中期末の溝1条、弥生時代終末～古墳時代初頭の溝2条、古墳時代中期の溝1条、古墳時代後期の溝2条を検出した。このうち、古墳時代初頭の溝は道路状造構の側溝と指摘されているもので、大量の遺物が廃棄されていた。

SD22 (Fig. 4-21) 調査区西側に位置し、N-31°-E の方位をとり、東側ではやや北側に曲がる。西側、東側とともに削平され、現在で長さ7.3m、幅0.7m、最深33cmを測る。断面は「U」字状をなし、底面は多少の凸凹はあるがほぼ平坦である。覆土は上層が黄褐色土、下層は黄褐色土に褐色土が斑状に混入する。水の流れた様相はない。須恵器、土師器、黒曜石が出土し、時期は古墳時代後期である。

出土遺物 (Fig. 21) 153～160は須恵器である。153・154は返りをもつ坏蓋で、154は明橙色を呈する。155～157は坏身で、156は白色砂粒を多量に含み、灰色を呈する。158は平底の鉢、159・160は壺である。159は色調が明橙色を呈する。161は壺の把手、162は土師器の壺の肩部片である。



Ph.17 SE407 出土遺物

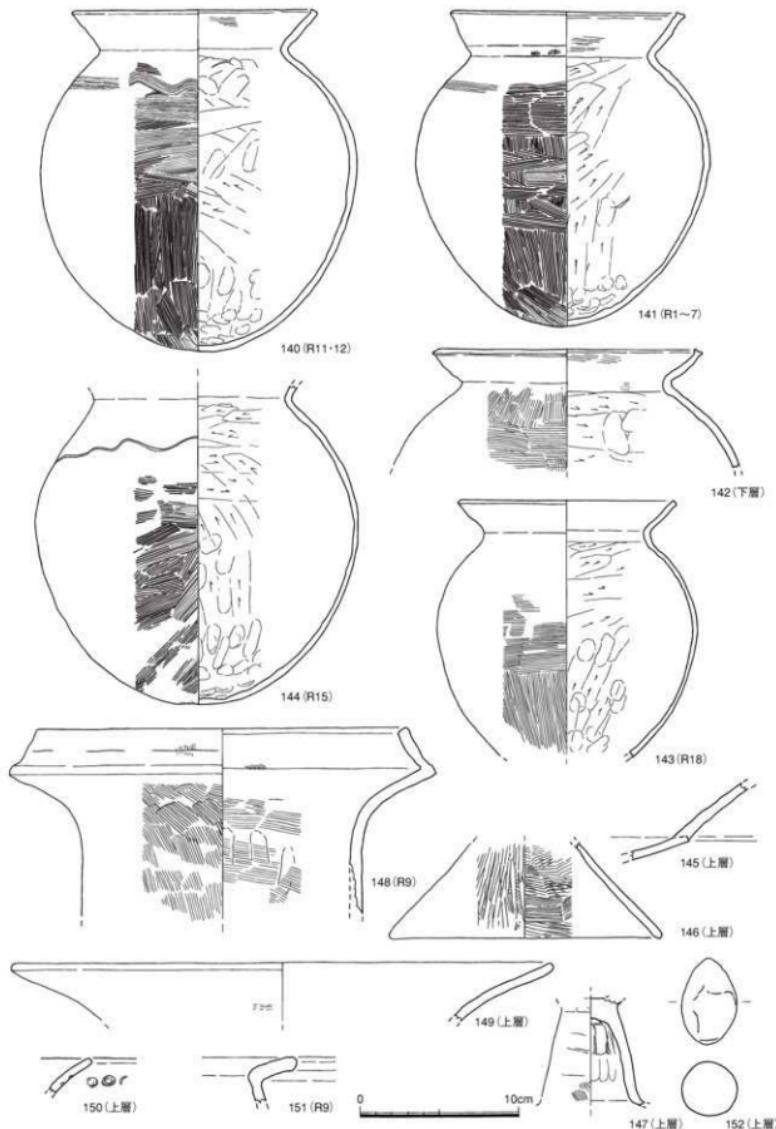


Fig.20 SE407 出土遺物実測図 (1/3)

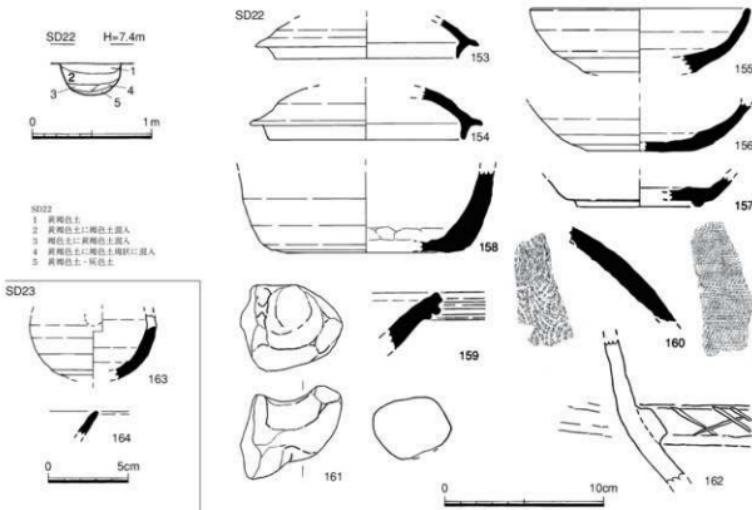


Fig.21 SD22 実測図(1/40) およびSD22・23 出土遺物実測図(1/3)

SD23 (Fig. 4.) 調査区西側に位置し、方位は N - 35° - W である。南側は SC163 に削平され、北側は調査区外へ延びる。現存で長さ 3.75m、幅 0.9m、最深 8cm を測り、底面は北側の方が低くなる。覆土は黄褐色土である。須恵器、土師器が少量出土し、溝の時期は古墳時代後期である。

出土遺物 (Fig. 21) 163・164 は須恵器である。163 は壺、164 は壺の口縁部片である。

SD164・165 (Fig. 4-22・23 Ph. 18 ~ 22) 調査区中央に位置し、並行して走る2本の溝で、西側が SD164、東側が SD165 である。この溝は那珂遺跡から比恵遺跡の丘陵上を通る道路状構造の側溝と考えられ、これまでの調査で延長 1.5km が確認されている。南側、北側ともに調査区外へ延び、調査区内では、長さ 16.5m を検出した。2 本の溝の間隔は内側の上端で約 6.0m を測る。水の流れた様相はない。SD164 の方位は N - 29° - W であるが、北側で N - 38° - W とやや西側へ振れる。中央部を側溝に削平されるが、ほぼ連続すると思われる。幅 0.4 ~ 0.6m、深さ 25 ~ 33cm を測る。断面は「U」字状をなし、底面は北側に向かって低くなる。覆土は黒褐色土を呈し、中層から下層にかけて遺物が大量に廃棄される。特に北側部分に集中が見られた。SD165 の方位は N - 20° - W である。北側から延びてきた溝は中央部を SC293、SK237、側溝に削平され、途切れる。溝は南側で再び検出できるが (③区)、この溝は確実に一旦立ち上がり、北側の溝へは続かない。陸橋部にあたる可能性がある。但し、道構面は大きく削平されているため、溝は浅くなっているだけで、途切れていない可能性もありうる。溝の幅は 0.4 ~ 0.8m、深さ 10 ~ 45cm を測り、断面は「U」字状をなす。南側の②区では底面が階段状となっており、南側が 1 段深くなる。③区でも同様に階段状を呈し、北側が 1 段深くなる。覆土は上層が黒褐色土、下層が暗黄褐色土である。遺物は上層から中層にかけて大量に出土した。出土遺物の傾向としては、下層に弥生時代終末期、上層に古墳時代初頭の遺物が出土し、掘削時期は、弥生時代の終末と考えられる。古墳時代初頭にはこの溝は廃棄されたと思われる。他に黒曜石が 2 点 (6) 剥片石器参照、凹み石、磨石が出土する。

出土遺物 (Fig. 23 ~ 29・37) 165・166 は SD165 出土で、165 は凹み石、166 は磨石である。

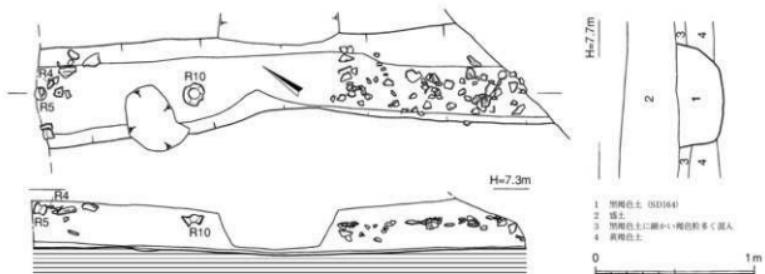


Fig. 22 SD164 ①区実測図 (1/30)



Ph.18 SD164 ①区 (南から)



Ph.19 SD165 ②区 (東から)



Ph.20 SD165 ③区上層遺物出土状況 (東から)



Ph.21 SD165 ③区下層遺物出土状況 (南から)

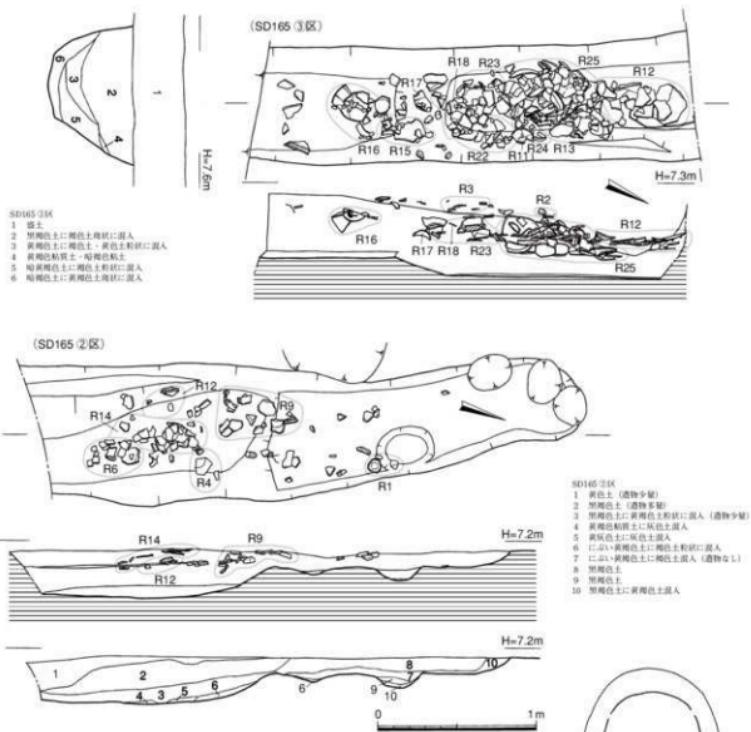
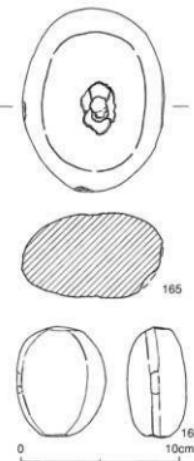
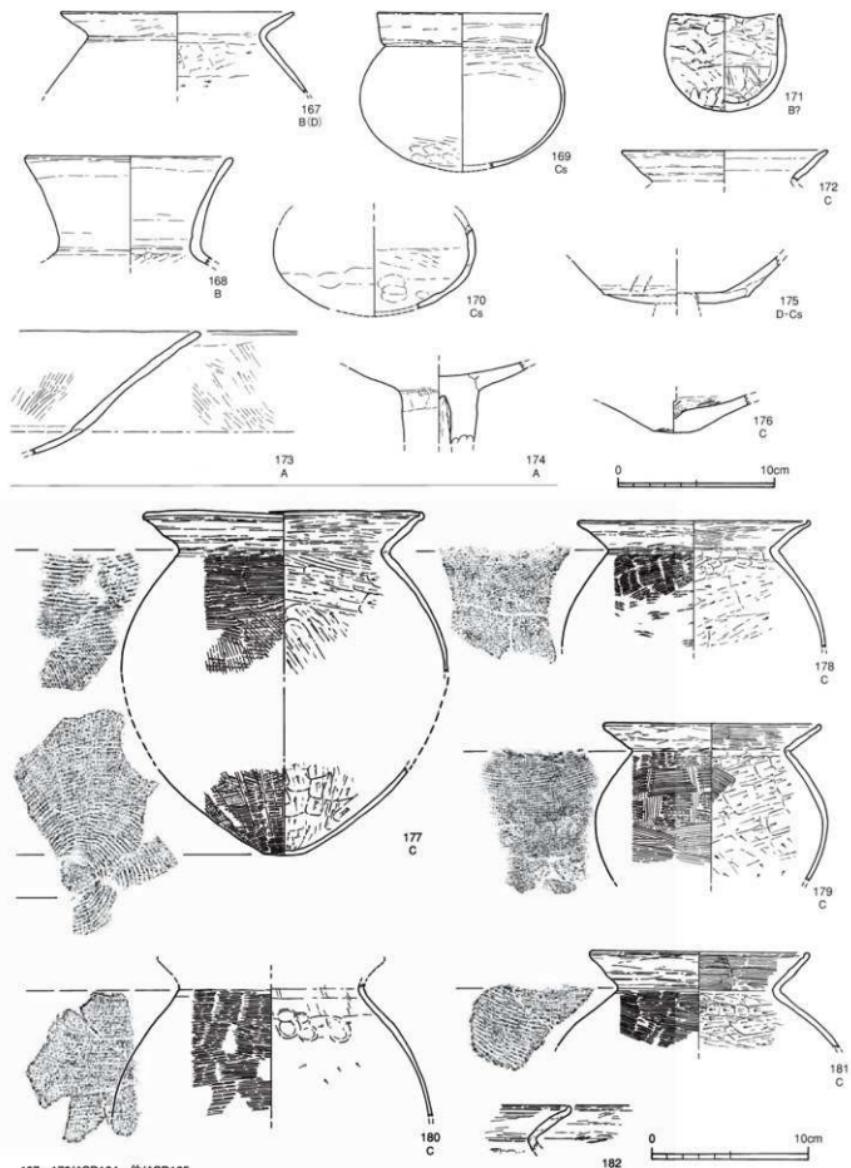


Fig.23 SD165 実測図 (1/30) よび出土遺物実測図 (1/3)



Ph.22 SD164・165 (東から)





167～176はSD164、他はSD165

Ph.24 SD164・165 出土古式土師器① (1/3)

SD164、SD165 出土土器 (Fig. 24 ~ 29)

SD164 および SD165 からは、古墳時代初頭の古式土師器が多数出土したほか、弥生土器も出土した。

溝の時期を示すのは古式土師器 (Fig. 24 ~ 28) であるが、特に SD165 における一括土器群の出土状況と溝の縦断面との関係からみても、ある時期に掘り直しされた後の廃棄に伴うものとすべきである。両溝が道路側溝であろうことからすれば、溝の維持管理が長くなされたと考えられ、これらの土器は必ずしも溝の掘削時期を示さないであろう。なお古式土師器の説明については、詳細は観察表 (表 1・2) を参照されたい。また古式土師器の分類と編年は、久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」 (『庄内式土器研究』 19) に掲載し、また「筑前型庄内甕」の型式分類は、久住猛雄 2005 「3世紀の筑紫の土器」 (『邪馬台国時代の筑紫と大和』 香芝市二上山博物館) も参照されたい。観察表および挿図中の A,B,C,D とは製作技法系統を示す。A は在地系、B は伝統的 V 様式系、C は庄内式系、D は布留系である (久住 1999)。また E は山陰系、Cs は「精製器種 B 群」 (次山淳 1993 「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』 40・2) を指す。

167 ~ 176 (Fig. 24) は SD164 出土の古式土師器 (一部弥生土器か)。167 は B 系統作者の布留系變模倣。II A ~ II B 期。172 は口縁部のみが筑前型庄内甕 I 式。I B 期の可能性。173 は在地系高杯だが、杯部上半の比率と杯部深さから II A 期かそれ以前の型式。174 は丹塗痕跡があり、形態的にも弥生終末またはそれ以前の後期の可能性がある。176 は推定二重口縁壺の底部で、C 系では形態的に II B 期か。169・170 は水滸胎土の精製器種 B 群。以上、II A 期前後の土器が多い。

177 ~ 226 は SD165 出土の古式土師器 (一部弥生土器か)。これらのうち、177 ~ 198, 200 ~ 208, 217 は溝③区の「中層」「中層以下」で番号と取上げた遺物で、ほぼ一括出土としてよい。特に、③区中央～北側出土の「R11, 13, 24, 25」「R17, 18, 19, 20, 21, 22」は一括出土と言える。これらは筑前型庄

表1: SD164、SD165 出土古式土師器観察表 (1)

番号	古式土師器 （古式土器）	形状	特徴	測定値 (mm) (幅×高さ)	寸法測定 (mm) (幅×高さ)	外底測定	内底測定	充填 （充填物）	測定 （充填物）		地質	備考
									（幅×高さ） (mm)	（幅×高さ） (mm)		
167	167-1 167-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
168	168-1 168-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
169	169-1 169-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
170	170-1 170-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
171	171-1 171-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
172	172-1 172-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
173	173-1 173-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
174	174-1 174-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
175	175-1 175-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
176	176-1 176-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
177	177-1 177-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
178	178-1 178-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
179	179-1 179-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
180	180-1 180-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
181	181-1 181-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
182	182-1 182-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
183	183-1 183-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
184	184-1 184-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
185	185-1 185-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
186	186-1 186-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
187	187-1 187-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
188	188-1 188-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
189	189-1 189-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
190	190-1 190-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
191	191-1 191-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
192	192-1 192-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
193	193-1 193-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
194	194-1 194-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
195	195-1 195-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
196	196-1 196-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
197	197-1 197-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
198	198-1 198-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
199	199-1 199-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
200	200-1 200-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
201	201-1 201-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
202	202-1 202-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
203	203-1 203-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
204	204-1 204-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
205	205-1 205-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
206	206-1 206-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
207	207-1 207-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
208	208-1 208-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
209	209-1 209-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
210	210-1 210-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
211	211-1 211-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
212	212-1 212-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
213	213-1 213-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
214	214-1 214-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
215	215-1 215-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
216	216-1 216-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
217	217-1 217-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
218	218-1 218-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
219	219-1 219-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
220	220-1 220-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
221	221-1 221-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
222	222-1 222-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
223	223-1 223-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
224	224-1 224-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
225	225-1 225-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器
226	226-1 226-2	Ⅱ B (13)	壺	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	11.4×6.0	砂利・土	11.4×6.0	11.4×6.0	サトウ	古式土器

*表1・2の作成は西原・久住が行った。

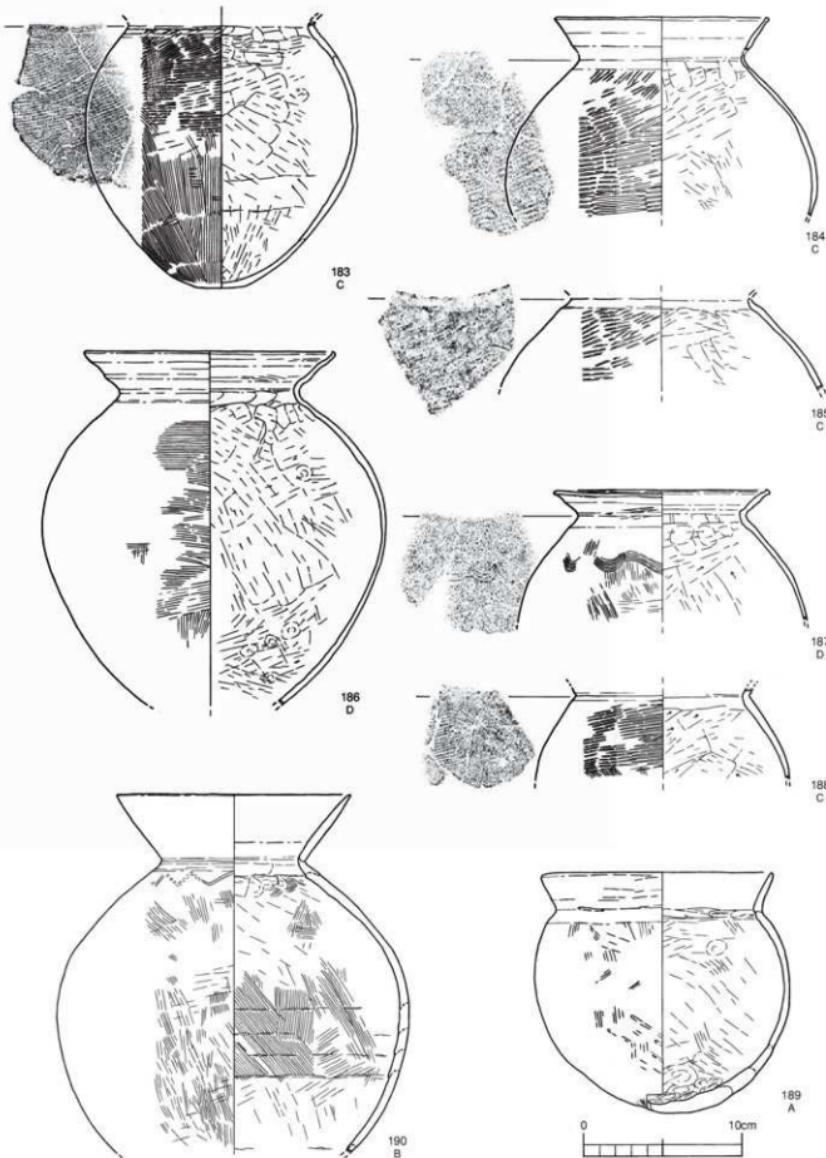
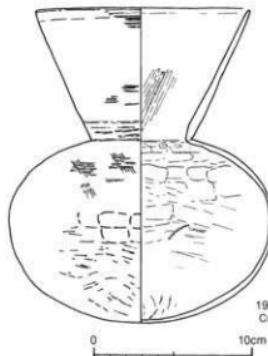
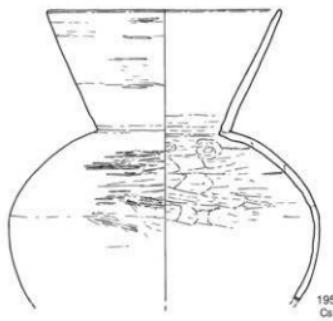
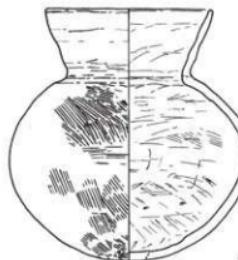
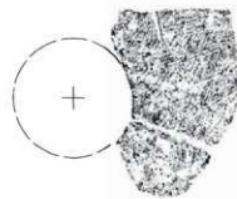
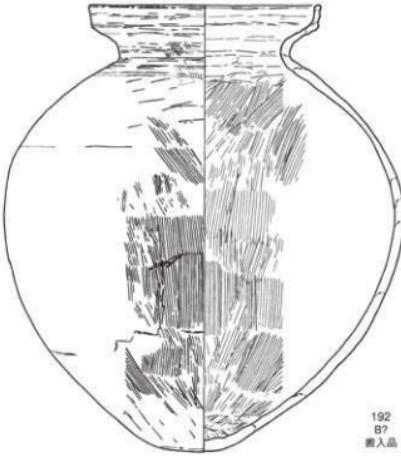
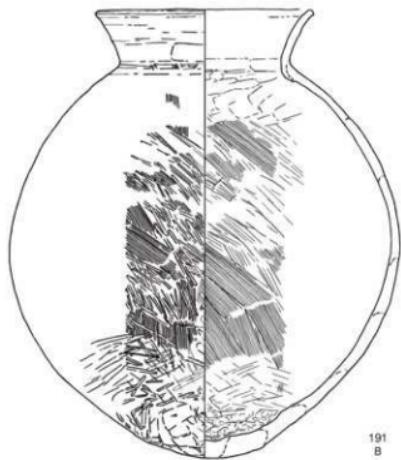


Fig.25 SD165 出土古式土師器② (1/ 3)



0 10cm

Fig.26 SD165 出土古式土師器③ (1/3)

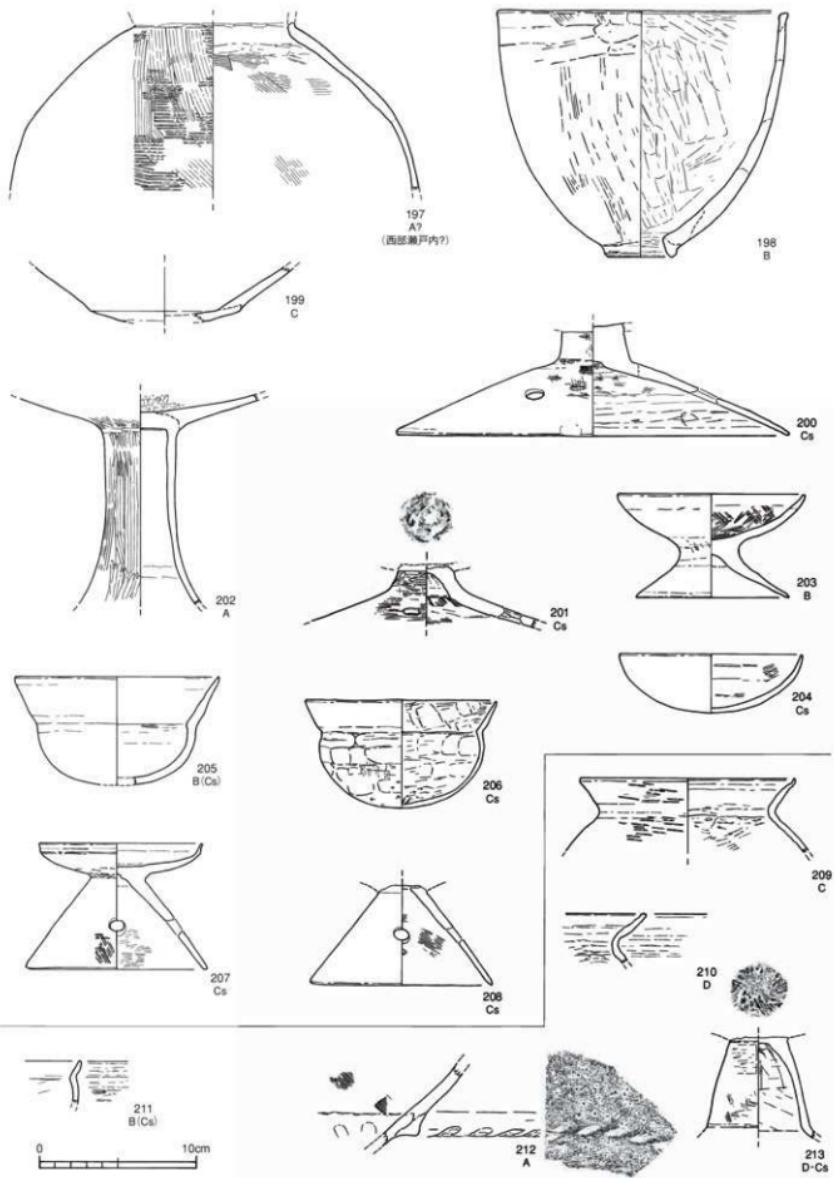


Fig.27 SD165 出土古式土師器④ (1/3)

表2：SD164、SD165出土古式土師器觀察表（2）

内甕の組み合わせなどから、「Ⅱ A 期」の指標となるセットである。また 199,209～213 は他の③区出土で、209,212,213 は上層出土である。次に 214～216 は①区出土、218～226 は②区出土である。

177～185、188は一括出土のうち筑前型庄内妻で、日式を主体とし、I式とIII式を伴う。ただしI式の

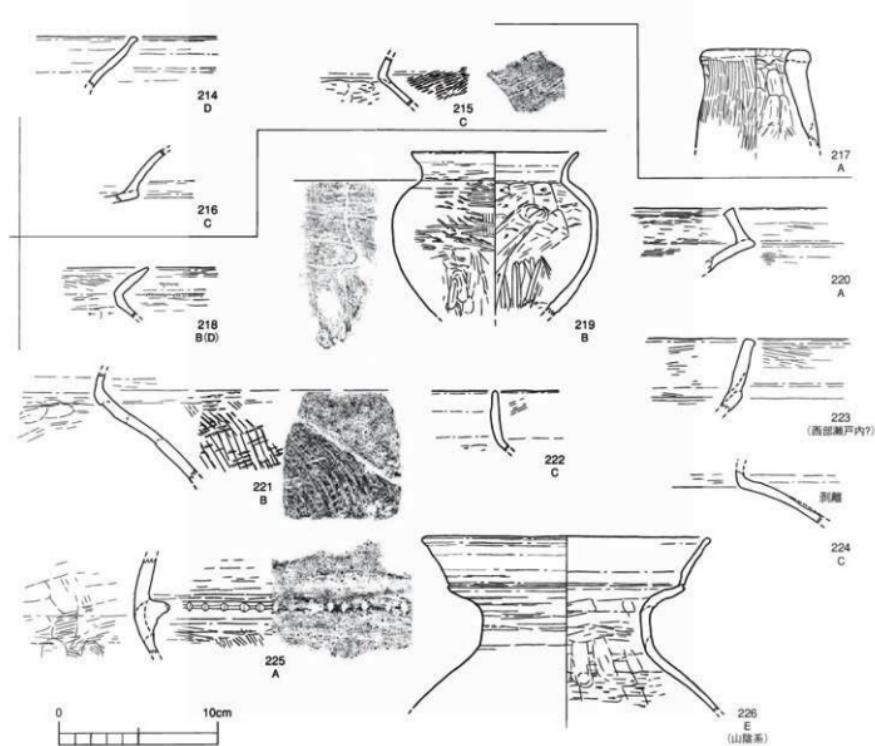


Fig.28 SD165 出土古式土師器⑤ (1/3)

うち178は口縁部の特徴がより古相で、遺存率から本来はⅠB期のものか。177は底部が古相で、遺存率は良好だが、「R25下層」の取上げで古い廃棄（ⅠB期）の可能性がある。178も「R25下層」で同様に古相か。186は頸部がしまるのは一見新相だが、口縁部が非常に薄く作られ、「北部九州型布留甕」の最古相。187は口縁部が短く、口縁部ヨコナデ調整のあり方以外の胴部形態（ナデ肩）などの全体的な作りは共伴の庄内甕に類似し同時期の所産であり、製作集団も同一か。右上タタキ痕跡があり、庄内甕180,185に近い雰囲気。190は肩上部に薄く細い2本のヘラ描線による山形文の痕跡。189は在地系甕の小型品。191は煤が付着し甕として使用された甕。192は胎土から非在地の搬入品。西部瀬戸内などに類例か。194は胎土と色調から播磨産の可能性。193は焼成前底部穿孔のようであり、本来は埴墓に供獻される器種。195は内面ケズリの精製長頸甕で、出土位置からもⅡA期の一括と少し異なりⅡB期か。196はⅡA期でよい型式。197是在地系の可能性もあるがあるいは西部瀬戸内に類例か。205は一見新相の形態だが、作りが本来の精製器種と異なりイレギュラーなもの。206は精製で古相の小型丸底甕Ⅱa類。202是在地系高杯でⅡA期でもよい型式。207は庄内系小型器台Ⅱa類。209の庄内甕は新相の型式。210は口縁部が短く、古相の布留系甕。211はやや粗製の作り。215は小片だが筑前型庄内甕Ⅰ式でも古相で、ⅠB期であろう。218,219は甕B（V様式系）の変容品。内面ケズリでⅡA期以降。220は在

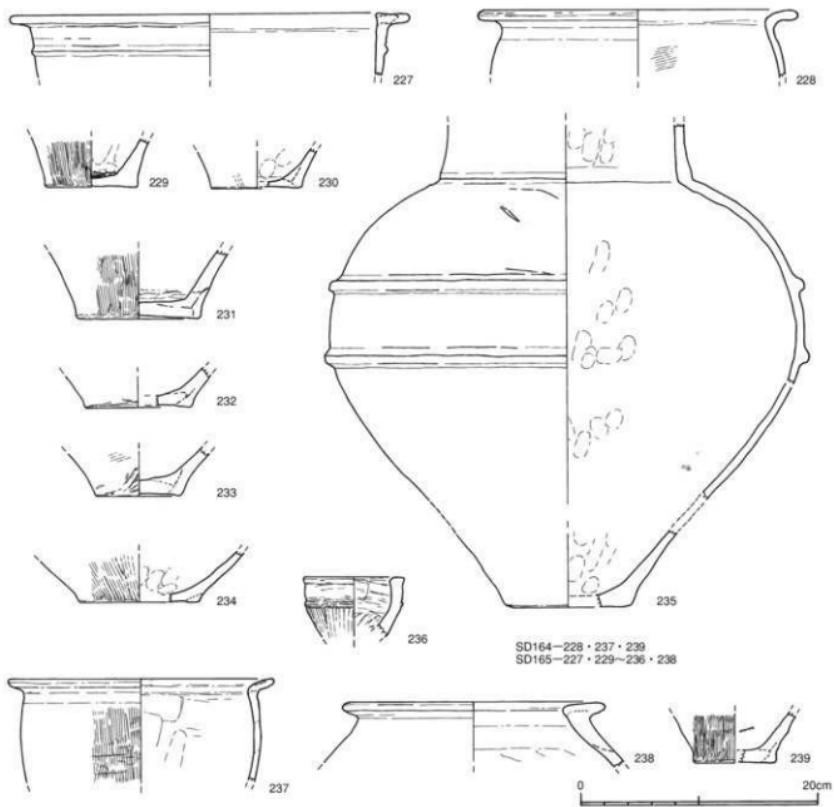


Fig.29 SD164・165 出土弥生土器(1/4)

地系複合口縁部壺で弥生後期後半～IA期までか。221は甕Bのやや大型品。222は精製の短頸直口壺。223は西部漸戸内ないし四国に類例か。224と216は同一個体の二重口縁壺の可能性。224に焼成剥離があり、近辺で製作か。225は在地系大甕で、突帯の特徴などからII A期より古い。226は山陰系甕だが在地産で、胎土や色調、焼成が庄内甕に類似。

Fig.29にはSD165,SD164出土の弥生中期頃の土器を示した。観察表は省略している。227,229～236,238はSD165、228,237,239はSD164。227,231,233,238,239は須玖I式、228～230,232,234,235,237は須玖II式。236の小型鉢は粗雑な作りで後期初頭に下る。227,228,237は甕、235は壺で須玖II式でも古相か。238は甕というより壺とすべきか。底部のうち、229～231,239はおそらく甕、232～234は壺であろう。本調査地点は遺構の重複が激しく、弥生中期段階の遺構が不明瞭だが、これらの土器の存在は石器の出土と合わせ、少なくとも須玖I式期には集落が展開していたことを示す証左である。

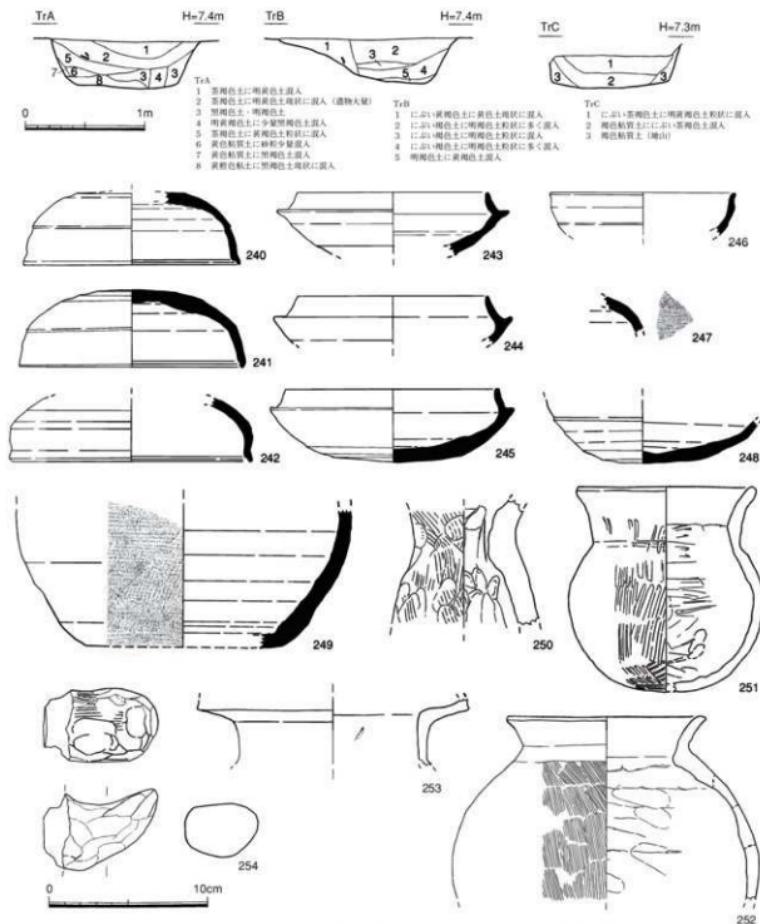


Fig.30 SD242 実測図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3)

SD242 (Fig. 4-30) 調査区中央に位置し、方位は N - 18° - W である。北側は削平され、南側は調査区外へ延びる。現存で長さ15m、幅1.2m、最深35cmを測る。断面は逆台形状をなし、底面は多少の凸凹はあるがほぼ平坦である。覆土は土層図に示す通り、にぶい茶褐色土を主体に褐色粘質土、黄色粘質土が混入する。自然堆積の様相を呈し、水の流れた様相はない。須恵器、土師器が、上層から多く出土する。また、混入と思われるが、青銅器の鋳型が出土する。溝の時期は古墳時代中期である。

出土遺物 (Fig. 30-31 Ph. 23) 255は単面范の銅戈鋳型である。鋒部を上にするととき、脊をはさんで胡が右下に傾斜する穿、柄にかけての部分にある。戈の形状にそって黒変していることから鋳造に使用されたことがわかる。鋳型の横断面は厚さ3cm弱の扁平な逆台形を呈している。黄灰色で微細な結晶体が観察され、いわゆる石英長石斑岩を素材とする。

柄の中央には縦方向の条線、穿に併行する横方向の線が2条刻まれている。穿の直上に左下がりの2条の線が確認されることから、柄には本来綾杉文が刻まれていたことがわかる。綾杉の軸部は深く刻まれているため、より鮮明に残ったのである。鋳型面は摩滅をうけているが、それ以外の面に二次的な改変は認められないため砥石に転用されたとは言いがたい。

穿の脊寄りから胡の端部までは少なくとも5.2cmを測る事から、製品は、胡の幅12cmほどと考えられる。

さて胡の幅が12cmといえば中細形から中広形へ移行する段階の法量に該当する。また穿に併行する横方向の条線の幅8.5mmについても真木(熊本県)のように中細形銅戈であっても、条線の幅が1cmをこえる例があるため、型式の決め手とはならない(常松幹雄2000「福岡市下山門敷町遺跡出土の銅戈について」『福岡市博物館研究紀要』第10号、福岡市博物館)。そこで柄の有軸の交点から援の端までの幅を検討すると、その値は鋳型としては八田4号鋳型(中細形C類)と吉木(中広形)の間におさまる型式となる(岩永省三2003「武器形青銅器」「考古資料大観6」小学館)。吉木の鋳型は、中広形でも鍔がとおり、全長も37cmほどにとどまる古相の特徴を呈している。製品としては三並ヒエデ4号銅戈(中細形C類)が候補となる(伊崎俊秋 1999「福岡県夜須町出土の銅戈」「甘木市歴史資料館報」甘木市歴史資料館)。

以上から本例は、岩永分類の中細形C類から中広形にかかる段階に位置づけられよう。

(参考文献:下條信行1989「銅戈鋳型の変遷 一伝福岡市八田出土明治大学蔵銅戈鋳型についてー」『明治大学考古学博物館 館報』No.5、明治大学考古学博物館)

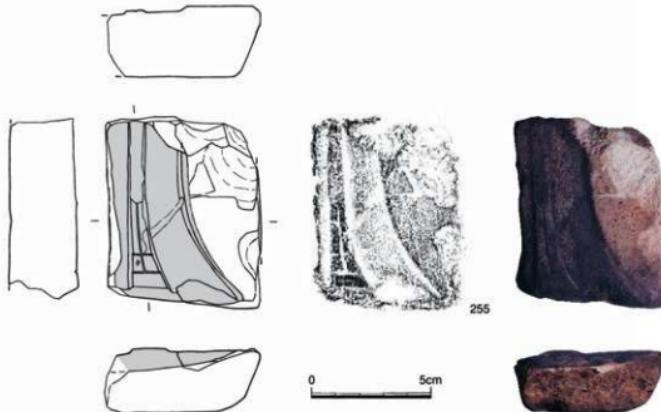


Fig.31 SD242 出土遺物実測図② (1/2)

Ph.23 SD242 出土遺物

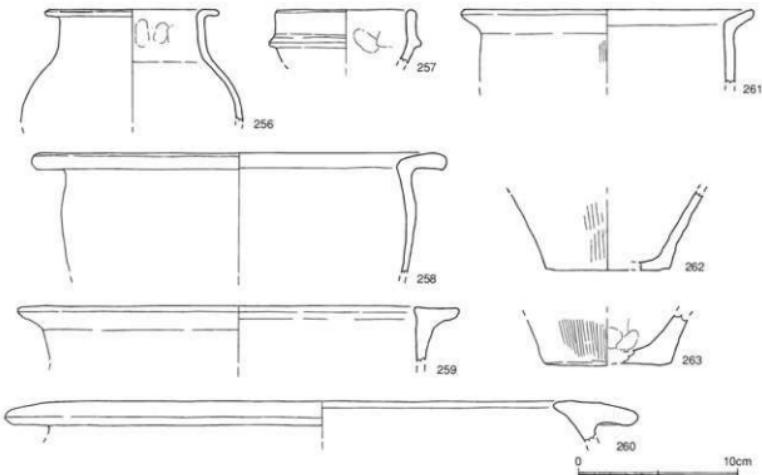


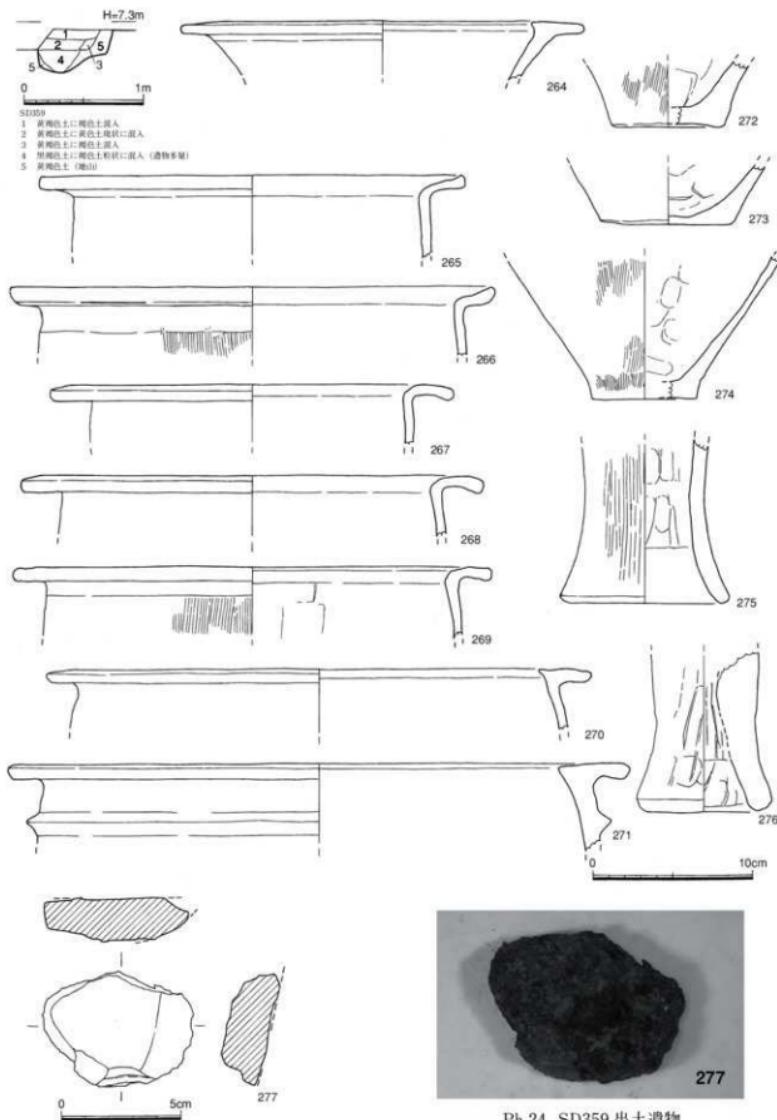
Fig. 32 SD277 出土遺物実測図 (1/3)

240～249は須恵器である。240～242は壺蓋で、口縁端部に内傾する明瞭な段を有し、天井端部に沈線を巡らし、稜をつくる。天井部外面は2/3の範囲が回転ヘラ削りによって調整される。240は焼成が悪く、色調は白色を呈する。241は天井部の器壁が厚く、色調は灰橙色を呈する。243～245は壺身で、壺蓋同様、底部外面は2/3の範囲が回転ヘラ削りによって調整される。246は高壺の壺部で、体部中位に沈線を巡らし、稜をつくる。口縁端部はわずかに外反する。247は翫の体部片である。肩部に波状文が巡る。248は壺の底部片で、内面に円弧印きが残る。底部は回転ヘラ削りで調整する。250は支脚で、調整は粗く、指押さえで仕上げる。251・252は土師器の翫で、頸部から外反する口縁部をもつ。251の外面は粗い印き、内面は削りで調整する。252の外側は刷毛目、内面は指ナデで調整する。253は二重口縁壺の口縁部片で、混入と思われる。254は翫の把手である。

SD277 (Fig. 4) 調査区西側に位置し、方位はN-20°-Wである。南側は側溝、東側はSD164に削平される。現存で長さ2.1m、幅0.45m以上、最深30cmを測る。底面は北側がわずかに深くなる。覆土は黒褐色土を呈する。水の流れた様相はない。弥生土器、黒曜石の剥片が出土し、時期は弥生時代中期から後期初頭である。

出土遺物 (Fig. 32) 256～263は弥生土器である。256は広口壺で、頸部が内傾気味に直立し、口縁部は平坦である。器壁は薄く、胎土には金雲母、角閃石を多量に含む。257は鉢の口縁部片で、口縁下に三角突帯を巡らせる。胎土には金雲母、赤褐色粒を含み、にぶい橙色を呈する。259～261は翫で、いずれも器面が磨滅し、調整は不明である。258は肥厚した「L」字状口縁を有し、胎土には金雲母、赤褐色粒を含み、色調は橙色を呈する。259-260は翫先状口縁をもち、260は端部がやや垂下する。261は「く」字状を呈する口縁をもつ。262・263は平底の底部である。いずれも褐色を呈し、262の胎土は赤褐色粒を含む。

SD359 (Fig. 4-33) 調査区西側に位置し、方位はN-25°-Wである。南側は緩やかに立ち上がり、北側は調査区外へ延びる。現存で長さ5.75m、幅0.5m、最深20～45cmを測る。断面は「U」字状をなし、南側の方が深くなる。覆土は上層が黄褐色土、下層は黒褐色土で多量の弥生土器が含まれる。遺物は



Ph.24 SD359 出土遺物

Fig.33 SD359 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/2)

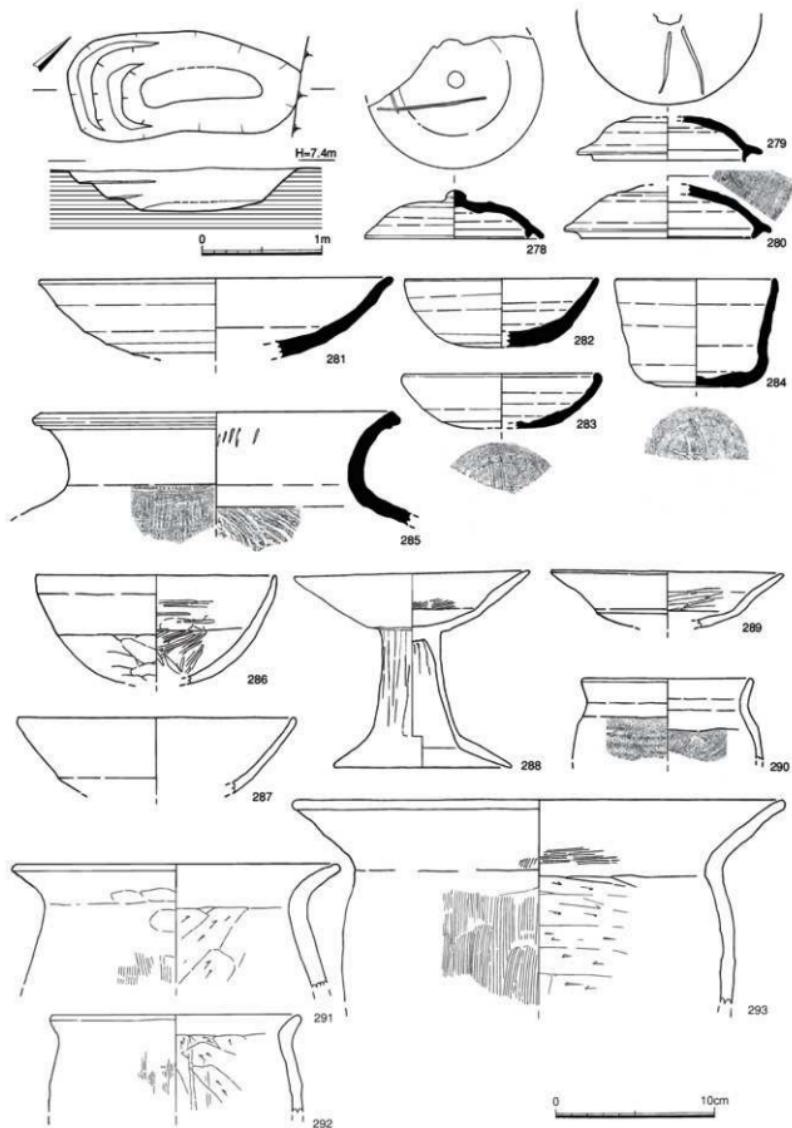


Fig.34 SK24 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)

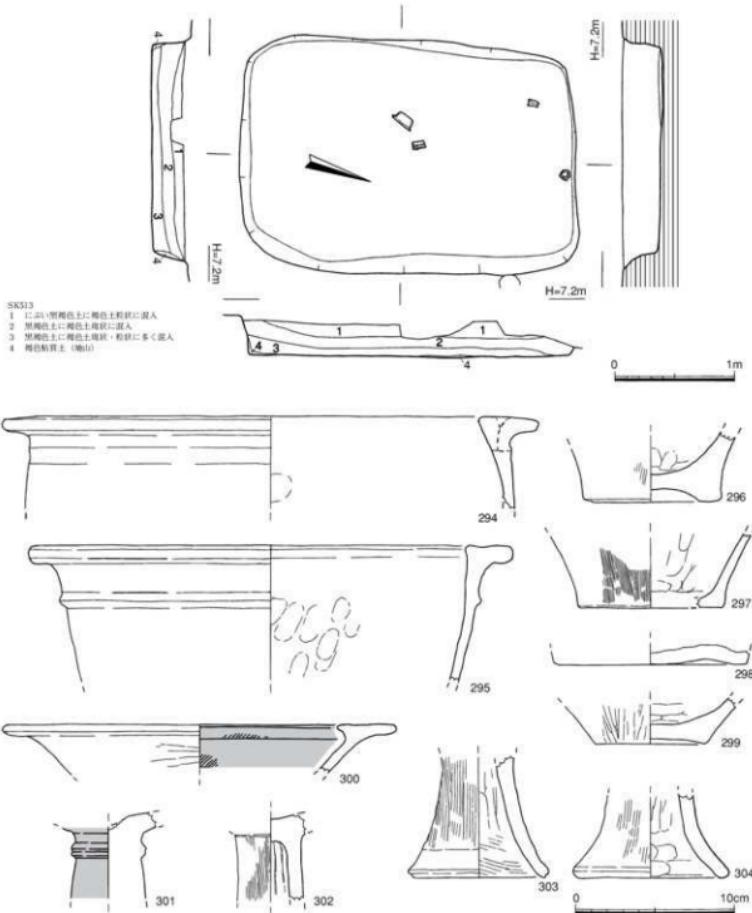


Fig.35 SK513 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



特に南側の深い部分に集中していた。水の流れた様相はない。また、特筆すべき遺物として、鋳造品の破片が1点出土する。時期は弥生時代中期末である。

出土遺物 (Fig. 33 Ph. 24) 264～276は弥生土器である。264は広口壺の口縁部片で、垂下した鶴先状の口縁をもつ。265～271は甕で、265は口縁端部を上方に跳ね上げ、266は口縁部上面を凹状に窪ませ、やや肥厚させる。267・268の口縁部は長く、端部は垂下する。269は口縁内側に綾い稜線をもち、端部は平坦に仕上げる。270・271は内側に突出した逆L字状口縁をもち、271は口縁下に三角形の突帯を巡らす。272～274は底部片で、いずれも平底で、外面は刷毛目、内面は指ナデで調整する。275・276は器台である。275は器壁が薄く、内面はナデ、外面は縦方向の刷毛目で調整する。276は器壁が厚く、内面は指ナデ、指押さえで調整する。277は單面范で造られた鋳造品の一部であり、表層の剥落の状態から脱炭処理を施した可鍛鉄の可能性がある。また溝の時期から鉄斧ではないかと思われる。横断面の上方の平坦面と右上方から左下方に走る稜線は、遺存している可能性が大きい。また、刃部先端部分の破片と考えると刃部は凹状を呈し、段をもつ。現存で、長さ4.9cm、幅6.1cm、厚さ1.9cmを測り、重さは89.52gである。表面にクラックがみられるが、気泡は観察できない。

4) 土坑

土坑は多數検出したが、遺物を多量に出土したものは、弥生時代中期後半の土坑1基、古墳時代後期の土坑1基である。

SK24 (Fig. 34 Ph. 25) 調査区西側に位置する。平面プランは橢円形を呈し、長さ1.95m、幅0.9m、深さ30cmを測る。西側は段を有し、底面は平坦である。覆土は茶褐色土で、須恵器・土師器が多量に出土した。出土遺物より土坑の時期は古墳時代後期である。

出土遺物 (Fig. 34) 278～285は須恵器である。278～280は返りをもつ環蓋で、278は天井部につまみを有する。天井部は回転ヘラ削りで調整され、他は回転ナデを施す。280は黒色粒を胎土に含む。281は皿で、丸底を呈し、口縁部は強く外反する。底部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデで調整する。胎土に細かい黒色粒、白色砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。282・283は底部が丸みをもつ环である。ともに底部外面は回転ヘラ削りで調整する。282は明褐色、283は灰色を呈する。284は平底の小鉢で、底部外面は静止ヘラ削りを行う。285は甕の口縁部片である。286～293は土師器である。286は丸底の鉢で、口縁部と体部に段を有し、口縁部は横方向のナデ、外面は削りで調整する。内面にはわずかに磨きが残る。287～289は高环である。287は坏部下位に小さな屈曲があり、口縁端部で内渦する。288・289の口縁部は下位で外反する。290～293は甕である。290は小型のもので、内外面叩きで調整される。291～293は口縁部が強く外反し、内面は強い削りで調整される。

SK513 (Fig. 35 Ph. 26) 調査区東側に位置し、SC323を切る土坑である。平面プランは長方形を呈し、長さ2.8m、幅1.9m、深さ30cmを測る。壁はほぼ直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は黒褐色土で、褐色土が粒状、斑状に混入する。遺物は弥生土器の小片、黒曜石の剥片が出土する。出土遺物より土坑の時期は弥生時代中期後半である。

出土遺物 (Fig. 35) 294～304は弥生土器である。294・295は甕で、ともに逆「L」字状の口縁部をもち、295は口縁下に三角形の突帯を1条巡らす。296～299は底部片で、296・299は上げ底を呈する。300～302は高环で、300は坏部内面に赤色顔料が残る。外面は磨滅する。301は脚部片で、上位に1条の「M」字状突帯を巡らす。外面に赤色顔料が塗布される。302は脚部片で、縦方向の強いナデで調整した後、縦方向の刷毛目を施す。303・304は器台である。303の端部は凹状に窪む。外面は縦方向の刷毛目、内面は303が横方向の刷毛目とナデ、304はナデと指押さえで調整する。

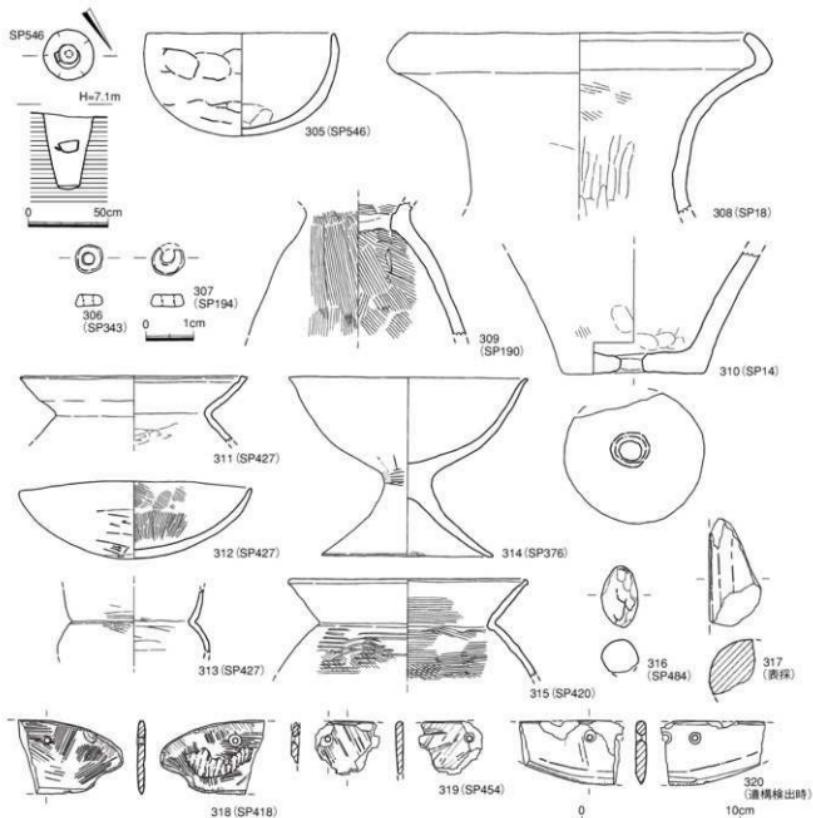


Fig.36 SP546 実測図 (1/30) およびピット出土遺物実測図 (1/3 · 1/1)

5) ピット出土遺物 (Fig. 36)

305はSP546から出土した。SP546 (Fig.36) は調査区東側に位置する。平面プランは直径32cmの円形を呈し、深さは46cmを測る。覆土は茶褐色土で、中位から土師器が出土した。時期は古墳時代中期である。305は土師器の鉢で、器面は磨滅するが、指押さえがわずかに残る。306・307は滑石製の白玉である。306が0.1g、307は0.09gを量る。308は弥生土器の二重口縁壺である。309は脚部片で、太く、脚部は膨らみながら広がる。内外面とともに粗い刷毛目で調整される。310は穿孔をもつ弥生土器の底部片である。焼成前のもので、直径が約1.3cmの穿孔である。311～313は一括出土したもので、311は土師器の甕、312は鉢、313は小型丸底壺である。314は土師器の高環で、環部は深く、丸みを帯び、口縁端部はわずかに外反する。315は土師器の甕である。316は土師器の投弾で、一部欠損するが、重さは15.53gである。317は変成岩の磨石で、81.37gを量る。318～320は石包丁である。318・319は小豆色を呈した立岩産で、丁寧に研磨調整が施される。320は粘板岩製で、細かい擦痕が多く残る。重さは318が19.32g、319が7.68g、320が29.15gである。

6) 剥片石器

1

本調査では59点の剥片石器類が出土した(表2)。遺物の多くは遺構内から出土したが、出土土器類からみて遺構に伴う時期ではなく、先行する時期の石器類が混入したものと判断される。石器類は全て黒曜石であり、表面の風化状況から、風化の著しい2点と風化の少ない57点の二群に区分される。前者は後期旧石器時代、後者は弥生時代と推定される。以下ではこれらのうち後期旧石器時代の2点と弥生時代の11点について報告する。

2

321は黒曜石製の剥片であり、表面の風化が著しい。平面五角形に近い幅広の剥片であり、打面調整が施され、背面の先行剥離は周囲から求心方向に認められる。目的剥片ならば「原ノ辻型台形石器」の素材形態に類似する。322は黒曜石製の縦長剥片であり、表面の風化、摩滅、ガジリが著しい。埋没過程の二次的移動を考慮する必要がある。323～330は黒曜石製の二次調整剥片である。何れも漆黒色不透明の良質黒曜石を素材とする不定形剥片であり、打面以外の刃縁に二次的な小剥離、微剥離が認められる。323～326、330は打面が残るが、327～329は剥片の分割や折断片を利用している。小剥離のなかで327、329には打角が直角に近く背済し的調整と見られるものがある。また327には背面と腹面に研磨痕があり(図中アミ部)、左側縁は研ぎ出して刃部を形成している。331、332は石錐である、小型の縦長剥片を素材とし、剥片先端を剥離調整し錐部を作出している。332の先端は欠損している。333は石核であり、原石の形状を保ち、剥離は石核調整初期段階であり、僅かに見られるのみである。平滑な自然面をもつ角礫状の素材は内眼で腰岳産黒曜石に類似する。

3

2点の後期旧石器時代の資料は、何れも剥片であり、時期の比定は困難である。このうち1点は「原ノ辻型台形石器」の素材に類似し、そうであれば後期旧石器時代後葉に位置付けられよう。

風化の少ない57点については石材、表面の風化状況が共通し同一の石器群と考えられる。少い資料であるが組成比率は石器類34%、剥片・碎片類56%、石核類10%である(表1)。剥離技術は僅かに寸詰まりの縦長の剥片を含むが、不定形剥片を主体としている。石錐を伴わず二次調整剥片を主体に石錐を伴う石器組成から、弥生時代中期前葉～中葉の時期に比定される。本調査ではこの時期の遺構は明らかでないが、遺構内に混入した遺物に同時期の土器類が散見される。福岡平野で同時期の石器群は、板付遺跡や四箇船石遺跡、西新遺跡などで認められるものの、他時期遺物との混入や定形石器に特徴がなく抽出例が十分ではなく、なお実態解明は今後の課題といえる。

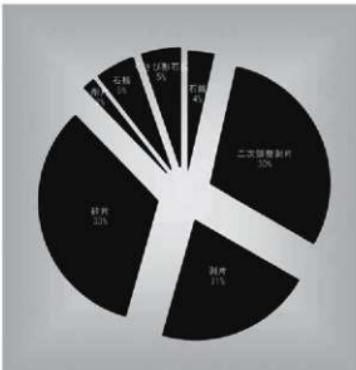


表1. 弥生時代剥片石器群の器種組成



Fig.37 剥片石器 (1/2)

表2. 第99次調査出土剥片石器一覧表

数値はmm

番号	遺物名	版上	番号	器	種	残存状況	石材	高さ	幅	厚さ	風化	美濃	備考	番号	遺物名	版上	番号	器	種	残存状況	石材	高さ	幅	厚さ	風化	美濃	備考
1	SC001	北側上層		鉢形	丸底	a	14	11	3	0.8				32	SP130			鉢形	a	47	9	4	弱				
2	SC163	15		次調査有剥片	漆ガリ	a	35	35	9	0.8	222	等級		33	SP131			次調査有剥片	鉢形	a	29	20	4	弱			
3	SC163	上層		鉢形	鉢形	a	16	12	5	0.8				34	SP131			鉢形	鉢形	a	16	29	3	弱			
4	SC163	上層		鉢形	鉢形	a	14	8	3	0.8				35	SP131			鉢形	鉢形	a	14	16	3	弱			
5	SC166	下層		鉢形	鉢形	a	21	16	5	0.8				36	SP131			鉢形	鉢形	a	18	10	2	弱			
6	SC123	①下層		鉢形	鉢形	a	22	14	4	0.8				37	SP131			鉢形	鉢形	a	14	16	3	弱			
7	SC123	②底溝		鉢形	鉢形	a	14	9	2	0.8				38	SP131			鉢形	鉢形	a	19	7	2	弱			
8	SC123	③下層		鉢形	鉢形	a	17	22	10	0.8				39	SP131			鉢形	鉢形	a	6	12	3	弱			
9	SC123	2(4)層		鉢形	鉢形	a	19	13	6	0.8	322			40	SP156			鉢形	鉢形	a	11	17	6	弱			
10	SC123	④下層	3	次調査有剥片	鉢形	a	20	25	8	0.8	324			41	SP153			次調査有剥片	鉢形	a	26	22	7	弱	325		
11	SC123	④下層	4	次調査有剥片	鉢形	a	6	13	7	0.8				42	SP153			次調査有剥片	鉢形	a	22	15	5	弱	327	表面面研磨有	
12	SC123	⑤下層		次調査有剥片	鉢形	a	22	12	6	0.8				43	SP177			くじら柄	鉢形	a	16	19	8	弱			
13	SC123	⑥下層		鉢形	鉢形	a	20	12	6	0.8	331			44	SP127			次調査有剥片	鉢形	a	19	17	4	弱			
14	SC123	⑦下層		くじら柄	鉢形	a	22	14	7	0.8				45	SP199			次調査有剥片	鉢形	a	15	24	4	弱			
15	SC123	⑧下層		次調査有剥片	鉢形	a	21	23	6	0.8				46	SP123			鉢形	鉢形	a	27	27	7	弱			
16	SC123	⑨下層		次調査有剥片	鉢形	a	15	23	7	0.8				47	SP127	上層	次調査有剥片	鉢形	a	15	18	3	弱	329			
17	SC123	⑩下層		次調査有剥片	鉢形	a	25	28	4	0.8				48	SP129			鉢形	鉢形	a	18	7	3	弱			
18	SC123	⑪下層		鉢形	鉢形	a	12	17	3	0.8				49	SP154	上層	くじら柄	鉢形	鉢形	a	15	15	7	弱			
19	SC123	⑫下層		鉢形	鉢形	a	10	18	4	0.8				50	SP152			次調査有剥片	鉢形	a	16	22	8	弱	329		
20	SC123	⑬下層		鉢形	鉢形	a	20	7	3	0.8				51	SP170	柱材	次調査有剥片	鉢形	鉢形	a	15	16	8	弱			
21	SC123	⑭下層		鉢形	鉢形	a	17	7	2	0.8				52	SP170	柱材	次調査有剥片	鉢形	鉢形	a	16	20	4	弱	329		
22	SC123	⑮下層		鉢形	鉢形	a	10	12	5	0.8				53	SP170			鉢形	鉢形	a	19	11	5	弱			
23	SC123	⑯下層		鉢形	鉢形	a	10	11	3	0.8				54	SP170			鉢形	基部欠損	a	21	9	2	弱			
24	SD102	西側		鉢形	破片	a	12	17	4	0.8				55	SP171	上層(SC123)	(G)	鉢形	鉢形	a	9	16	9	弱			
25	SD164	①下層		鉢形	鉢形	a	20	19	7	0.8				56	SP173			鉢形	鉢形	a	15	8	5	弱			
26	SD165	②下層		鉢形	鉢形	a	30	58	31	0.8	323	原石(?)直立		57	SP169			鉢形	鉢形	a	17	12	5	弱			
27	SD177	下層		鉢形	鉢形	a	14	17	5	0.8				58	開拓中	495		鉢形	鉢形	b	33	34	10	弱	321		
28	SD129	(←L)		鉢形	基部欠損	a	32	16	8	0.8				59	土壤			次調査有剥片	鉢形	a	22	19	4	弱	329		
29	SE1407	J17		鉢形	鉢形	a	23	15	6	0.8																	
30	SE147	西側2層		次調査有剥片	鉢形	a	19	27	6	0.8	323																
31	SKS13	(←L)C2層		鉢形	鉢形	a	16	26	5	0.8																	

IV. まとめ

1. 集落の変遷

比恵遺跡群ではこれまで、旧石器時代から中世に至る遺物・遺構が見つかっており、連続的に集落が営まれていた様相が確認されている。今回の第99次調査では弥生時代中期中葉から古墳時代後期にかけての遺構を検出した。遺物では後期旧石器時代に属する黒曜石の剥片、弥生時代中期前葉～中葉の黒曜石の二次調整剥片を主体とした石器群が出土する。また、遺構の時期に伴っていないが、細網型戈の鉄型の出土は、これまでの青銅器工房の存在を裏付けるもので、铸造鉄器の出土と合わせ、比恵遺跡群の集落の特異性をうかがわせるものであった。遺構としては道路状遺構に伴う並列二条溝が検出され、溝の中からは大量の土器が出土し、溝の時期・性格を考えるうえでも貴重な発見となった。最後に今回の発掘調査で検出された集落の変遷を簡単にまとめておく。

弥生時代中期中葉から後葉にかけての円形竪穴住居跡を1軒検出した。中期後半になると、北側に円形竪穴住居跡1軒、長方形を呈した土坑1基、中期末には2条の溝(SD277・SD359)を検出した。これは北側の第62次調査の溝と繋がる可能性がある。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては方形の竪穴住居跡2軒、溝2条(SD164・SD165)、少し遅れて井戸1基が掘削されている。この2条の溝が道路状遺構の側溝と指摘されている溝である。2本の溝の内側は約6mを測り、路面は検出できなかったが、これが当時の道路の幅であったと思われる。溝の底面に高まり段状をなしている状況や、溝が途切れ陸橋状となっている点など、これまでの調査で検出された溝と共通性を持つ。同時期の竪穴住居跡は、ほぼこの溝と方向を一致している。古墳時代前期には方形の竪穴住居跡が2軒築かれ、そのうちの1軒は、並列溝の間に異なる方向に建てられている。これは、溝、道路状遺構の終焉を意味する。古墳時代中期になると窓を敷設した方形の竪穴住居跡2軒と井戸1基が造られる。古墳時代後期には溝2条と土器を廃棄した土坑1基を検出している。(星野)

2. 並列溝 SD164・SD165 と出土した古式土師器について

並列二条溝 SD164 と SD165 からは古式土師器が出土し、土器群の時期は溝が機能した時間幅の一部を示す。北側の62次(福岡市報告第595集)、南側の45次(第402集)で検出されていた並列溝は今回の調査により繋がったが、この並列溝は比恵・那珂遺跡群を略南北に約1.5km 貫く長大な遺構の一部で、その性格は道路の側溝である(久住1999a)。並列溝=道路側溝であり、その性格上、道路の維持に伴い何度も溝浚えをしたり、あるいは再掘削することが考えられ、出土遺物から当時の掘削時期を推定する際には注意が必要である。つまり下層出土でも当時の掘削時期とは離れていることがありうるし、あるいは層位と型式が逆転しうる。並列溝について道路の可能性が報告で最初に指摘された50次(第451集)では、並列溝の一方の SD292 中層の土器は II A ~ II C 期(土器編年は久住1999b)であり、むしろ II A 期が多いが(Fig.38-3 ~ 12、うち3,4,6,9,10は II A 期、5は II C 期)、下層(Fig.38-13 ~ 15)は II B 期である(Fig.38の土器は報告では未図化)。那珂62次(第597集)では、並列溝009を一部切る方形周溝墓001より新しい土器が並列溝009の下層で出土する現象があり、部分的な再掘削が考えられる(久住1999a)。比恵62次では、溝の比較的下層から II B ~ II C 期の土器が出土するが、掘削時期を示さない。62次では並列溝に切られる直前の溝からは弥生後期後半(下大隅式)新相の土器が出土し、これよりも並列溝の成立が新しいとだけ言える。比恵36次(第289集)の方形周溝墓 SD01 は、並列溝=道路の軸線と有機的関係にあるが、I B 期古相の土器群であり(久住2006)、並列溝はこの時期までの成立である。那珂16次 SD37(第291集)では、I A 期のV様式系甕が下層から完形で出土し、溝の掘削時期を示す可能性がある。溝浚えや再掘削の有無は各調査での溝の土層観察で検証されるべきであるが、従来の調査で意識的な観察がなされたかや疑問もあり、今後の課題となる。さて99次の土器群だが、すでに報告したように筑前型庄内甕の型式群や古相の北部九州型布留甕、精製器種の型式から、SD165-③区の一括土器群をはじめ大半は II A 期であり、一部に I B 期と II B 期がある。並列溝の掘削は I A 期前後と推定されるので、溝の若干の埋没があった後に、II A 期に当時の底面に近い下層レベルまで部分的に再掘削され、土器群が廃棄されたのだろう。土器片の一部に焼成剥離があり焼成失敗品廢棄をも含むが、ほぼ完形の甕や壺に煤が付着するものが少なくなく、使用後の廢棄が大半であろう。播磨や西部瀬戸内からの推定搬入品があり、精製器種や底部穿孔壺も含み祭祀行為による一括廃棄ではないだろうか。比恵50次(Fig.38)や、59次の2号溝(第562集)の II A 期土器群のように、II A ~ II B 期の土器群が一括出土するものが多く、この時期幅に並列溝や集落区画溝がさかんに再掘削され、それに伴う祭祀行為が多く行われた可能性がある。

久住1999a「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』74 / 久住1999b「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』19 / 久住2006「土師器から見た前期古墳の編年」『前期古墳の再検討』第9回九州前方後円研究会

(久住)

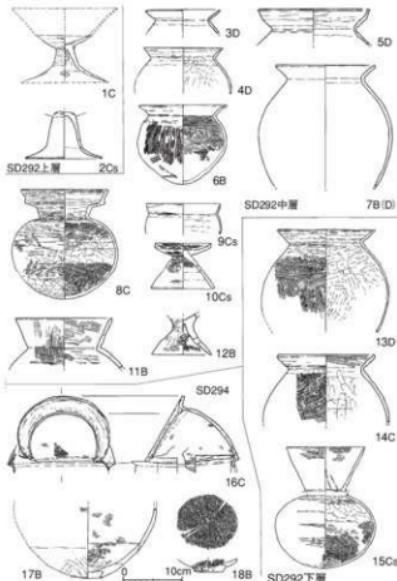


Fig.38 比恵 50 次並列溝出土土器(参考)(1/8)

報告書抄録

ふりがな	ひえ よんじゅうろく							
書名	比恵 46							
副書名	比恵遺跡群第 99 次調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	955							
編著者名	星野惠美／久住猛男／常松幹雄／古留秀敏							
編集機関	福岡市教育委員会							
発行機関	福岡市教育委員会							
発行年月日	20070330							
作成機関ID	40132							
郵便番号	810-8621	電話番号	092-711-4667					
住所	福岡県福岡市中央区天神 1-8-1							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北	緯			
比恵遺跡群 第 99 次	福岡県福岡市博多区 博多駅南 6丁目24-1, 25-2番地内	40132	0127	33° 34° 30°	130° 25° 51°	20050425 ～ 20050708	462	共同 住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
比恵遺跡群 第 99 次	集落	弥生／古墳	竪穴住居跡 8 井戸 2 土坑 5 溝 11 柱穴 多数		弥生土器・土師器・須恵器 石器・土製品・滑石小玉 銅戈鉄型・鑄造鉄製品			
要約	第 99 次調査区は比恵遺跡群の西斜面に立地し、弥生時代中期中葉から古墳時代後期にかけての遺構を検出した。遺物は古く、後期旧石器時代に属する黒曜石の剥片。弥生時代中期前葉～中葉の黒曜石の二次調整剥片を主体とした石器群が出土する。他に細型銅戈の鉄型、鑄造鉄器が出土する。弥生時代中期中葉から後葉の円形竪穴住居跡 1 輛、中期後半の円形竪穴住居跡 1 輛、長方形を呈した土坑 1 基、中期末には 2 条の溝を検出した。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては方形の竪穴住居跡 2 輛、溝 2 条、井戸 1 基を検出し、この 2 条の溝が道路状遺構の側溝と指摘されている溝である。古墳時代前期には方形竪穴住居跡 2 輹、古墳時代中期の方形竪穴住居跡 2 輹、井戸 1 基、古墳時代後期の溝 2 条と土坑 1 基を検出している。							

比恵 46

—比恵遺跡群第99次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第955集

2007 年(平成 19 年) 3 月 30 日

発行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
印刷 田中印刷
福岡市西区大字板氏 947-2